大分県立埋蔵文化財センター調査報告書　第12集

志 手 町 遺 跡

国道217号（平岩松崎バイパス）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２０

大分県立埋蔵文化財センター

序　文

本書は、国道217号（平岩松崎バイパス）道路改良事業に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部臼杵土木事務所の依頼を受けて実施した、志手町遺跡の発掘調査報告書です。

志手町遺跡は津久見湾に注ぎ込む青江川下流域に所在する遺跡です。この青江川下流域には発掘調査で中世寺院跡が確認された門前遺跡や、津久見市の有形文化財に指定されている世尊寺五重塔等の遺跡や文化財があり、また大友宗麟が晩年を過ごした場所としても知られていますが、この地域の歴史については資料に乏しく、まだ謎に包まれています。

志手町遺跡の発掘調査では、14世紀から15世紀前半にかけての掘立柱建物や土坑墓、井戸等の遺構や、土器・陶磁器類をはじめとした遺物が出土しました。陶磁器には中国産天目碗等稀少な資料も含まれることから、青江川河口域に展開した物資集散地のような性格を持った遺跡ではないかと考えられます。青江川を挟んだ対岸にある中世寺院跡の門前遺跡とも時期的に近く、両者の関連も注意されるところです。

このように、志手町遺跡の発掘調査では中世前半期の遺跡が確認されましたが、この発掘調査が津久見市において行政目的で行われた発掘調査としては２例目であり、津久見市の歴史解明に少なからず寄与することができるのではないかと考えています。本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和 2 年 3 月31日

大分県立埋蔵文化財センター
所長　江　田　　豊

例　言

1．本書は平成30年度に実施した、大分県津久見市志手町に所在する志手町遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は国道217号（平岩松崎バイパス）道路改良事業に伴い、大分県土木建築部臼杵土木事務所の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．志手町遺跡の発掘調査は平成30年4月16日～5月21日にかけて実施し、大分県立埋蔵文化財センター調査第一課　主査　横澤　慈が担当した。

4．発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。
- 株式会社九州文化財総合研究所（調査技師　三ツ股正明・調査助手　杉原宗久）

5．出土品の洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は令和元年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。遺構・遺物図版の作成は横澤が行った。

6．出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。

7．本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。

8．本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SB（掘立柱建物）、SA（柵列）、SK（土坑）、ST（墓）、SD（溝）、SE（井戸）、SP（柱穴）、SX（遺物集中ブロック）

9．本書の執筆・編集は横澤が行った。

目　次

序　文
例　言
目　次
第１章　調査に至る経緯と発掘調査の経過
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　発掘調査の経過 …… 2
第３節　整理作業・報告書作成の経過 …… 3
第４節　調査組織の構成 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　発掘調査の成果
第１節　発掘調査の概要 …… 7
第２節　調査区の基本層序 …… 7
第３節　遺構と遺物 …… 14
（１）掘立柱建物 …… 15
（２）柵列 …… 17
（３）井戸 …… 18
（４）土坑墓 …… 20
（５）土坑 …… 21
（６）溝 …… 33
（７）遺物集中ブロック …… 33
（８）柱穴状遺構 …… 35
（９）調査区出土遺物 …… 48
第４章　総括
第１節　遺跡の年代的位置付け …… 50
第２節　遺跡の評価 …… 53
第３節　総括 …… 56
遺構一覧表 …… 59
遺物観察表 …… 67
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　志手町遺跡発掘調査位置図(1/8,000)　…１
第２図　志手町遺跡と周辺の遺跡(1/25,000)　……６
第３図　志手町遺跡遺構配置図(1/400)　……９
第４図　志手町遺跡１区遺構配置図(1/200)　……10
第５図　志手町遺跡２区遺構配置図(1/200)　……11
第６図　志手町遺跡１区土層断面図(1/60)　……12
第７図　志手町遺跡２区土層断面図(1/60)　……13
第８図　志手町遺跡SB1実測図(1/50)　……14
第９図　志手町遺跡SB1出土遺物実測図(1/3)　…15
第10図　志手町遺跡SB2実測図(1/50)　……16
第11図　志手町遺跡SB2出土遺物実測図(1/3)　…17
第12図　志手町遺跡SA1実測図(1/40)　……17
第13図　志手町遺跡SA1出土遺物実測図(1/3)　…17
第14図　志手町遺跡SE010実測図(1/30)　……18
第15図　志手町遺跡SE010出土遺物実測図①(1/3)…19
第16図　志手町遺跡SE010出土遺物実測図②(1/3)…19
第17図　志手町遺跡ST116実測図(1/10)　……20
第18図　志手町遺跡SK036実測図(1/30)　……21
第19図　志手町遺跡SK100実測図(1/30)　……21
第20図　志手町遺跡SK108実測図(1/30)　……21
第21図　志手町遺跡SK110実測図(1/30)　……22
第22図　志手町遺跡SK110出土遺物実測図(1/3)…22
第23図　志手町遺跡SK113実測図(1/30)　……22
第24図　志手町遺跡SK113出土遺物実測図(1/3)…22
第25図　志手町遺跡SK141実測図(1/30)　……23
第26図　志手町遺跡SK141出土遺物実測図　……23
第27図　志手町遺跡SK151実測図(1/30)　……23
第28図　志手町遺跡SK151出土遺物実測図(1/3)…23
第29図　志手町遺跡SK172実測図(1/30)　……24
第30図　志手町遺跡SK172出土遺物実測図(1/3)…24
第31図　志手町遺跡SK176実測図(1/30)　……24
第32図　志手町遺跡SK176出土遺物実測図(1/3)…24
第33図　志手町遺跡SK186実測図(1/30)　……25
第34図　志手町遺跡SK190実測図(1/30)　……25
第35図　志手町遺跡SK190出土遺物実測図(1/3)…25
第36図　志手町遺跡SK191実測図(1/30)　……26
第37図　志手町遺跡SK191出土遺物実測図(1/3)…26
第38図　志手町遺跡SK194実測図(1/30)　……26
第39図　志手町遺跡SK196実測図(1/30)　……26
第40図　志手町遺跡SK201実測図(1/30)　……27
第41図　志手町遺跡SK202実測図(1/30)　……27
第42図　志手町遺跡SK214実測図(1/30)　……28
第43図　志手町遺跡SK214出土遺物実測図(1/3)…28
第44図　志手町遺跡SK215実測図(1/30)　……28
第45図　志手町遺跡SK215出土遺物実測図(1/3)…28
第46図　志手町遺跡SK227実測図(1/30)　……29
第47図　志手町遺跡SK229実測図(1/30)　……29
第48図　志手町遺跡SK230実測図(1/30)　……29
第49図　志手町遺跡SK236実測図(1/30)　……30
第50図　志手町遺跡SK248実測図(1/30)　……30
第51図　志手町遺跡SK248出土遺物実測図(1/3)…30
第52図　志手町遺跡SK254実測図(1/30)　……31
第53図　志手町遺跡その他の土坑実測図(1/30)…32
第54図　志手町遺跡SD007実測図(1/30)　……33
第55図　志手町遺跡SX093実測図(1/20)　……33
第56図　志手町遺跡SX093出土遺物実測図(1/3)…34
第57図　志手町遺跡SP002実測図(1/20)　……35
第58図　志手町遺跡SP003実測図(1/20)　……35
第59図　志手町遺跡SP003出土遺物実測図(1/3)…35
第60図　志手町遺跡SP046実測図(1/20)　……36
第61図　志手町遺跡SP046出土遺物実測図(1/3)…36
第62図　志手町遺跡SP054実測図(1/20)　……36
第63図　志手町遺跡SP054出土遺物実測図(1/3)…36
第64図　志手町遺跡SP058実測図(1/20)　……37
第65図　志手町遺跡SP058出土遺物実測図(1/3)…37
第66図　志手町遺跡SP062実測図(1/20)　……37
第67図　志手町遺跡SP062出土遺物実測図(1/3)…37
第68図　志手町遺跡SP078実測図(1/20)　……38
第69図　志手町遺跡SP078出土遺物実測図(1/3)…38
第70図　志手町遺跡SP105実測図(1/20)　……38
第71図　志手町遺跡SP105出土遺物実測図(1/3)…38
第72図　志手町遺跡SP106実測図(1/20)　……39
第73図　志手町遺跡SP106出土遺物実測図(1/3)…39
第74図　志手町遺跡SP109実測図(1/20)　……39
第75図　志手町遺跡SP109出土遺物実測図(1/3)…39
第76図　志手町遺跡SP114実測図(1/20)　……40
第77図　志手町遺跡SP114出土遺物実測図(1/3)…40
第78図　志手町遺跡SP122実測図(1/20)　……40
第79図　志手町遺跡SP122出土遺物実測図(1/3)…40
第80図　志手町遺跡SP130実測図(1/20)　……41
第81図　志手町遺跡SP130出土遺物実測図(1/3)…41
第82図　志手町遺跡SP136実測図(1/20)　……41
第83図　志手町遺跡SP136出土遺物実測図(1/3)…41
第84図　志手町遺跡SP137実測図(1/20)　……41
第85図　志手町遺跡SP137出土遺物実測図(1/3)…41
第86図　志手町遺跡SP150実測図(1/20)　……42

第87図　志手町遺跡SP150出土遺物実測図(1/3) …42
第88図　志手町遺跡SP175実測図(1/20) ……42
第89図　志手町遺跡SP175出土遺物実測図(1/3) …42
第90図　志手町遺跡SP188実測図(1/20) ……43
第91図　志手町遺跡SP188出土遺物実測図(1/3) …43
第92図　志手町遺跡SP193実測図(1/20) ……43
第93図　志手町遺跡SP193出土遺物実測図(1/3) …43
第94図　志手町遺跡SP197実測図(1/20) ……44
第95図　志手町遺跡SP197出土遺物実測図 ……44
第96図　志手町遺跡SP213実測図(1/20) ……44
第97図　志手町遺跡SP213出土遺物実測図(1/3)　44
第98図　志手町遺跡SP220実測図(1/20) ……45
第99図　志手町遺跡SP220出土遺物実測図(1/3)　45
第100図　志手町遺跡SP222実測図(1/20) ……45
第101図　志手町遺跡SP222出土遺物実測図(1/3)　45
第102図　志手町遺跡SP241実測図(1/20) ……46
第103図　志手町遺跡SP241出土遺物実測図(1/3) …46
第104図　志手町遺跡その他の柱穴状遺構実測図①(1/20) …46
第105図　志手町遺跡その他の柱穴状遺構実測図②(1/20) …47
第106図　志手町遺跡調査区出土遺物実測図(1/3) …49
第107図　志手町遺跡出土の主な土器・陶磁器(1/3) …51
第108図　志手町遺跡関連の土器編年・分類図(縮尺不同) …52
第109図　青江川下流域の地籍図集成(1/8,000)　…54
第110図　志手町遺跡と門前遺跡の時期別対応……56

表　目　次

遺構一覧表

志手町遺跡遺構一覧表① …… 61
志手町遺跡遺構一覧表② …… 62
志手町遺跡遺構一覧表③ …… 63
志手町遺跡遺構一覧表④ …… 64
志手町遺跡遺構一覧表⑤ …… 65

遺物観察表

第１表　志手町遺跡出土土器・陶磁器観察表① … 71
志手町遺跡出土土器・陶磁器観察表② … 72
志手町遺跡出土土器・陶磁器観察表③ … 73
第２表　志手町遺跡出土土製品観察表 …… 74
第３表　志手町遺跡出土石製品観察表 …… 75
第４表　志手町遺跡出土金属製品観察表 …… 76

写真図版目次

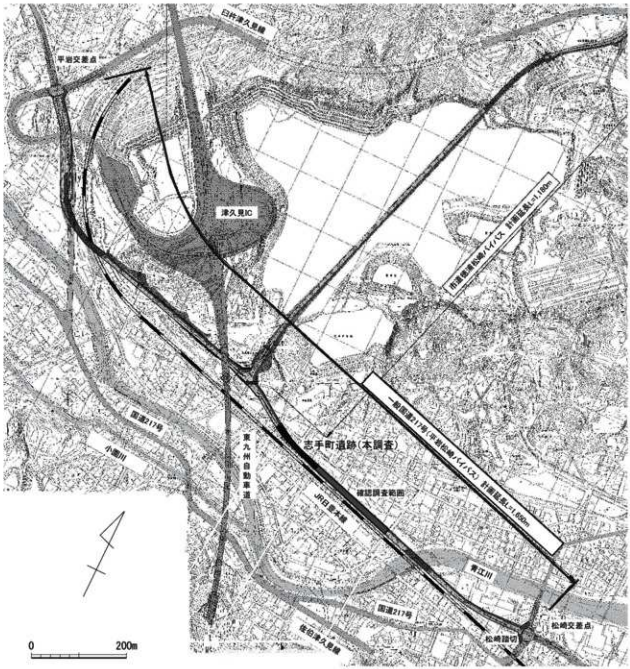
図番１　志手町遺跡から東方　青江川河口を望む
志手町遺跡から西方を望む
図番２　志手町遺跡から南方　門前遺跡を望む
志手町遺跡　１区　空中写真
図番３　志手町遺跡　２区　空中写真
志手町遺跡　１区　完掘（東から）
図番４　志手町遺跡　２区　遺構検出状況（西から）
志手町遺跡　２区　完掘（西から）
図番５　調査前状況
遺構発掘作業
２区　土層断面
１区　土層断面
SB1
図番６　SB1 検出状況
SB1（SP154）
SB1（SP154）骨出土状況
SB2（SP208）
SB2
図番７　ST116（西から）
ST116（南から）
腕骨除去状況
頭骨除去状況
完掘状況
図番８　SE010
SE010木製品検出
SK110
SE010完掘
SK110遺物出土状況
K151
図番９　SK191
SD007
SK172

SK236
SX093
SX093備前焼出土状況
図番10 SP002
SP054
SP106
SP136
SP002礎盤石
SP062
SP114
SP197
図番11 SP220（東から）
SP220（南から）
SP220 上部祭祀土器
取上状況
SP024
SP139
図番12 SB1出土遺物
第９図 1
第９図 5
第９図 2
第９図 3
第９図 6
SB2出土遺物
第11図 8
第11図 7
SA1出土遺物
第13図 9
SE10出土遺物
第15図 11
図番13 SE10出土遺物
第15図 12
第15図 13
第16図 4
SK110出土遺物
第22図 16
第22図 15
SK113出土遺物
第24図 18
SK141出土遺物
第26図 19
図番14 SK151出土遺物
第28図 20
SK172出土遺物
第30図 23
SK176出土遺物
第32図 24
SK191出土遺物
第37図 26
第37図 27
SK214出土遺物
第43図 29
SK215出土遺物
第45図 30
SK248出土遺物
第51図 31
SX093出土遺物
第56図 32
第56図 36
第56図 34
第56図 33
第56図 35
図番15 SX093出土遺物
第56図 37
第56図 39
第56図 38
SP046出土遺物
第61図 43
SP054出土遺物
第63図 44
SP062出土遺物
第67図 46
SP078出土遺物
第69図 47
SP105出土遺物
第71図 49
SP106出土遺物
第73図 50
SP114出土遺物
第77図 52
SP122出土遺物
第79図 53
SP136出土遺物
第83図 55
SP150出土遺物
第87図 58
SP175出土遺物
第89図 59
SP190出土遺物
第93図 61
図番16 SP197出土遺物
第95図 62
第95図 63
SP220出土遺物
第99図 65
第99図 66
SP222出土遺物
第121図 68
SP241出土遺物
第103図 69
第103図 70
調査区出土遺物
第106図 71
第106図 74
第106図 75
第106図 81
第106図 86
第106図 89

第１章　調査に至る経緯と発掘調査の経過

第１節　調査に至る経緯

志手町遺跡の発掘調査は、大分県土木建築部臼杵土木事務所が計画する、国道217号（平岩松崎バイパス）道路改良事業に伴い発掘調査を実施したものである。調査の起因となった平岩松崎バイパスは津久見市上青江から同セメント町をつなぐもので、路線延長は1,650mである。本事業は重要港湾である津久見港や広域交流拠点へのアクセス向上を図ることで地域産業の活性化や地域発展を目指すとともに、現国道ルートの慢性的な交通渋滞の緩和と踏切解消による沿道環境の改善、交通安全の向上を図るもので、併せて救急医療及び防災機能の強化が期待されている。



第１図　志手町遺跡発掘調査位置図（1/8,000）

この事業計画に対し、平成29年７月７日に事業予定地の一部で埋蔵文化財の有無を確認する予備調査を実施したところ、３基の柱穴遺構と数点の中世土器が出土し、遺跡の存在が明らかとなった。柱穴の1基には礎盤石を据えたものがあり、また出土した土師器から中世の集落遺跡と推定されることから、「志手町遺跡」と命名し大分県教育庁文化課へ遺跡の発見を報告するとともに、大分県遺跡台帳への登録を行った。

こうした成果を受けて、関係機関で埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、工期の都合もあり平成29年度中に記録作成のための本発掘調査を実施することとなった。11月27日には臼杵土木事務所から埋蔵文化財発掘調査（本調査）の依頼が提出され、それを受諾するとともに発掘調査実施計画書及び所要経費見積を回答し、調査着手に向けた準備にとりかかった。しかし、本調査に際して埋蔵文化財発掘調査支援委託を導入するため、その入札を数度執行したものの、いずれも入札不調となったことから、当該年度内での調査終了が困難となった。そのため再度関係機関で協議し、平成29年度中に未調査部分の確認調査を実施し発掘調査が必要な範囲を確定させることとし、それを踏まえて平成30年度当初に遺跡が確認された範囲の本発掘調査を実施することとなった。平成30年３月に実施した確認調査の結果、本調査が必要な範囲は約1,000㎡となった。

第２節　発掘調査の経過

平成30年度に入り、４月２日に改めて臼杵土木事務所へ再度本調査の実施計画書及び所要経費見積を提出し、本調査の準備に着手した。４月11日には文化財保護法第99条第１項に基づく発掘調査の施行を大分県教育委員会に通知するとともに、津久見市教育委員会及び臼杵津久見警察署へ発掘調査への協力を依頼した。

写真１　平成29年度立会調査

本調査の実施にあたっては、重機での表土除去、人力掘削（遺構検出・遺構発掘）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原図のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等を埋蔵文化財発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。支援業務委託における作業班は１班につき調査技師・調査助手各１名、作業員20名を基本とした。

写真２　立会調査で検出した遺構

本調査は平成30年４月16日に２区の表土掘削に着手し、人力による遺構検出作業、遺構発掘作業、写真及び実測図による記録作成作業、空中写真撮影を経て、５月１日に２区の埋戻しを完了した。大型速体を挟んで引き続き１区の調査に着手し、５月21日の埋戻し・調査機材等の撤収をもって現地作業を終了した。５月24日には大分県教育委員会及び津久見市教育委員会へ発掘調査の終了を報告するとともに、５月25日に臼杵津久見警察署へ文化財保護法第100条第２項に基づく埋蔵文化財の発見を通知した。この間の経過を調査日誌から以下に抜粋する。

- 4月10日　臼杵土木事務所と本調査の現地打合せ。調査範囲及びヤードの確認。地元へ調査の挨拶回り。
- 4月16日　重機による２区の表土掘削。津久見市教育委員会生涯学習課　小畑春美課長、國次弘道主幹、山下俊雄文化財専門員、根之木久美子地質研究専門員来跡。
- 4月23日　作業員による遺構検出作業開始。平成29年度の予備調査で確認した３基のピットを再検出。津久見市教育委員会　平山正雄教育長来跡。
- 4月26日　B6グリッドで遺物集中部を確認。瓦質土器摺鉢、備前焼摺鉢、天目片等出土、14～15世紀。
- 4月27日　２区の空中写真撮影。
- 5月１日　２区北壁土層断面実測。井戸SE010完掘、記録図化作業。
- 5月８日　２区の埋戻し。
- 5月10日　１区の表土掘削。ピットの内1基で検出面から２枚重ねの土師器坏出土、土器祭祀か。津久見市教育委員会山下俊雄氏来跡。
- 5月11日　１区表土掘削終了。調査区中央で総柱の掘立柱建物を確認。県臼杵土木事務所建設課企画道路班佐藤　毅主幹（総括）、山本真司主査来跡。
- 5月14日　１区の遺構検出作業開始。
- 5月15日　遺構発掘作業。SK116から骨が出土。埋蔵文化財センター　江田　豊所長、石丸一輝副主幹、堺井裕史主事来跡。
- 5月16日　SK116は頭骨が出土、側臥屈葬人骨。墓壙は１ｍ×0.6ｍ程の長楕円形プラン。
- 5月17日　午前、埋蔵文化財センター　綿貫俊一課長補佐、坂本嘉弘嘱託員、小野千恵美嘱託員来跡。
  午後、埋蔵文化財センター友岡信彦参事兼調査第一課長、土谷崇夫主任、宮内克己嘱託員来跡。
- 5月18日　１区の空中写真撮影。北壁土層断面実測。SK116人骨取上げ。埋蔵文化財センター　友岡信彦参事来跡。
- 5月21日　調査区の埋戻し。出土遺物及び発掘調査機材の搬出。調査終了。

第３節　整理作業・報告書作成の経過

発掘調査の出土品や調査記録類の整理作業は、令和元年度に実施した。整理作業は志手町遺跡を含む当該年度整理実施事業を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の区分けや収納等諸作業である。作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。

報告書作成にかかる遺構・遺物実測図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行い、令和２年１月に原稿を入稿し、３度の校正を経て本書を刊行した。令和２年３月末には本書の刊行をし、これを以て本事業を完了した。

第４節　調査組織の構成

志手町遺跡の発掘調査に係る調査組織は下記のとおりである（役職は調査当時）。

調査主体　　大分県教育委員会
調査機関　　大分県立埋蔵文化財センター

平成30年度　本発掘調査

調査責任者	江田　豊（大分県立埋蔵文化財センター所長）		
調査総括	友岡信彦（大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長）		
調査事務	森次正浩（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼総務課長）		
	石丸一輝（大分県立埋蔵文化財センター総務課副主幹）※９月30日まで		
	岡本佳子（	同	総務課主査）※10月１日から、教育改革・企画課併任
	堺井裕史（	同	総務課主事）
調査担当	横澤　慈（	同	調査第一課主査、調査担当）
	土谷崇夫（	同	調査第一課主任）

令和元年度　整理作業・報告書作成

調査責任者	江田　豊（大分県立埋蔵文化財センター所長）		
調査総括	友岡信彦（大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長）		
調査事務	松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター副所長兼総務課長）※４月26日から		
	岡本佳子（	同	総務課主査）※４月25日まで
	工藤慶弘（大分県立埋蔵文化財センター総務課専門員）		
	堺井裕史（	同	総務課主事）※11月29日まで
	池見佳輔（	同	総務課主事）※12月２日から
調査担当	横澤　慈（	同	調査第一課主査、整理作業・報告書作成担当）
	土谷崇夫（	同	調査第一課主任）
整理作業	吉田　寛（	同	調査第二課長、整理作業総括）※４月25日まで
	後藤晃一（	同	調査第二課長、整理作業総括）※４月26日から
	綿貫俊一（	同	調査第二課課長補佐）
	服部真和（	同	調査第二課主任、整理作業委託監理）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

津久見市は大分市の南東部に位置し、北西部は臼杵市、西部～南部は佐伯市と市境を接し、北及び東は豊後水道に面している。人口は17,431人（令和元年５月31日時点、津久見市ホームページによる）である。

市域は臼杵市との市境をなす長目半島から、佐伯市境をなす四浦半島にかけての海岸部はリアス式海岸となり、中心の津久見湾を取り囲むように鎮南山、姫岳、碁盤ヶ岳、彦岳等の標高500～700m級の山地が馬蹄形に取り囲む。それら丘陵から派生する尾根が海岸部にまで迫り出すために平地に乏しい地形を呈する。やや開けた平地は青江川と津久見川の河口付近にわずかに存在する程度で、そのエリアに人口が集中するために人口密度は高い。気候は比較的温暖で、海岸部には暖地植物である常緑樹のウバメガシが各地で群落を形成している。姥目のウバメガシは大分県、姥目公園のウバメガシや千怒新地のウバメガシは津久見市の天然記念物にそれぞれ指定されている。

交通は臼杵から四浦半島の上浦を経て佐伯へ至るJR日豊本線と国道217号、臼杵から彦岳を抜け弥生を経て佐伯に至る東九州自動車道や主要地方道佐伯津久見線（大分県道36号）が主要幹線となっている。

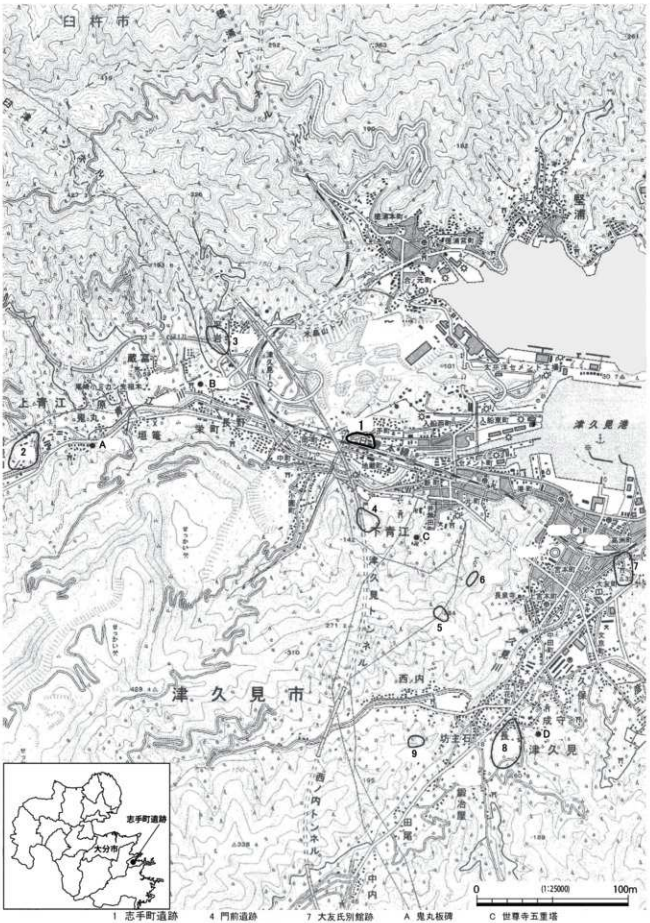
地質は秩父帯古生層に属し、特に津久見市上青江の水晶山から臼杵市野津町川登の風連鍾乳洞付近にかけて分布する津久見石灰岩層から産出する石灰岩と、それを原料とするセメント業は、市の中核的な産業となっている。その他産業としては水産業や農業があり、特に農業は温州ミカンやカボス等柑橘類の栽培が盛んである。こうした柑橘類の栽培は、天平12年（740）に仁藤仁左衛門が青江の松川に小ミカンを植えたことに遡るともいわれ、青江に所在し樹齢800余年ともいわれる尾崎小ミカン先祖木は、昭和12年（1927）に国の天然記念物に指定されている。

第２節　歴史的環境

古代における津久見市域は海部郡に属するが、古代から中世にかけてこの地域に関する資料は断片的にしか存在せず、不明な点が多い。中世には津久見衆と呼ばれる、大友氏に従属した在地勢力の存在が知られ、永享７年（1435）に起こった姫岳合戦では、津久見衆として薬師寺氏や津久見氏の名が見られるが、この津久見衆についてもその実態はよく分かっていない。戦国時代末期になると、大友義統に家督を譲った大友宗麟が臼杵から津久見に居を移し、天正15年（1587）に津久見で没している。近世になると、津久見市域は臼杵藩領と佐伯藩領に大きく二分されることとなり、現在の市域としてまとまるのは近代以降のことである。

明治に入り、明治４年の廃藩置県、明治５年の大区小区制の実施により、現在の津久見市域は大分県第４大区に編入されることとなった。明治22年の市制・町村制施行により、下浦・青江・津組・日代・四保戸の５村が成立（四保戸村は翌明治23年に四浦村と保戸鳥村に分割）する。大正10年（1921）には津組村が町制施行し津久見町となり、昭和26年（1951）に津久見町と日代村、四浦村、保戸鳥村が合併し津久見市が成立し、今日に至っている。

津久見市における考古学的な調査はほとんど行われておらず、その状況は不明な点が多い。国道217号臼津バイパス建設の際に平岩遺跡から出土したとされる弥生時代後期の長頸壺は、市の有形文化財に指定されている。周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている遺跡としては、弥生時代の平岩遺跡、長幸遺跡、古墳時代の岩屋口遺跡、弥生時代及び中世の門前遺跡、中世の大友氏別館跡、二重城跡、津久見古陣跡、津久見物見山跡、志手町遺跡がある。このうち発掘調査が行われ、かつ報告書によってその内容が明らかにされているのは門前遺跡だけであり、門前遺跡の調査では15世紀前半に廃絶した寺院跡が確認されている。この発掘調査で確認された寺院は現在下青江に所在する解脱閑寺の前身である可能性も指摘されている。また、世尊寺に所在する津久見市指定有形文化財の石造五重塔は、元は「塔の原」と伝承される場所から出土したものである。その他、津久見市指定の文化財としては川内石幢や道尾石幢、鬼丸板碑等の中世～近世の石造物が点在する。



1 志手町遺跡
2 岩屋口遺跡
3 平岩遺跡
4 門前遺跡
5 津久見古陣跡
6 津久見物見山跡
7 大友氏別館跡
8 長幸遺跡
9 二重城跡
A 鬼丸板碑
B 道尾石幢
C 世尊寺五重塔
D 大友宗麟墓

第２図　志手町遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）

第３章　発掘調査の成果

第１節　発掘調査の概要

志手町遺跡は津久見市志手町に所在し、標高は約5.3mである。遺跡の南には青江川が蛇行しながら東へ流れ、津久見湾に注ぎ込む。遺跡の北には水晶山があったが、石灰岩の採掘により大部分は消失している。遺跡の立地としては、この水晶山の麓の微高地上に形成された遺跡ということになる。しかし、遺跡地一帯は既に区画整理が行われており、微地形の把握が困難になってきている。青江川を挟んだ対岸の丘陵地には門前遺跡が所在する。この門前遺跡は東九州自動車道の建設に伴い発掘調査が行われ、15世紀前半に作られ、ごく短期間のうちに廃絶した中世寺院跡が確認されている。

発掘調査の起因となった国道217号平岩松崎バイパスは、東九州自動車道津久見インターチェンジからJR日豊本線沿いにバイパスを整備し、松崎交差点に接続する計画である。平成29年度にこの計画路線上において立会調査を実施した結果、３基の柱穴状遺構を検出し、うち１基から中世の土師器片が出土したことから、中世の集落遺跡であることが推定され、約1,000㎡について発掘調査が必要と判断された。平成30年３月には本調査必要箇所のさらに東側の確認調査を実施し、遺跡が広がるかどうかの確認を行った。確認調査箇所は分厚い盛土がなされており、地下の状態の確認は困難を極めたが、盛土下の耕作土あたりから湧水が認められ、その下には湿地状の堆積層が認められた。こうしたことから、青江川の旧河道あるいは津久見湾の入江状の地形であることが想定され、これ以上の遺跡の広がりは認められないと判断した。

本発掘調査は平成29年度の調査で遺跡の確認された916㎡を対象に実施した。調査にあたっては、世界測地系に基づく10m方眼の調査グリッドを設定し、南北方向にアルファベット、東西方向にアラビア数字を付し、両者を組み合わせてグリッド記号とし、第３図に示すように、例えば一番北西端のグリッドであれば「A1グリッド」のように呼称した。発掘調査では排土置場を確保する必要から、調査地を１区と２区に分けて切り返して行い、まず東側の２区の調査を完了した後、１区の調査を行った。調査はまず、重機を使用して表土の除去を行い、次いで人力により遺構検出作業、遺構掘削作業を行った。遺構は検出した順に３桁の数字を用い「S-●●●」の遺構番号を付与した。遺構の性格による遺構略号は報告書作成時に付したが、遺構番号は調査時のものをそのまま踏襲したため、遺構種別ごとに番号の振り直しは行っていない。検出された遺構等については写真撮影やトータルステーションを用いた実測図作成により記録した。出土遺物は遺構やグリッドごとに取り上げた。１区・２区ともにそれぞれマルチコプターによる空中写真撮影を行い、最後に調査区を埋め戻して調査を完了した。

第２節　調査区の基本層序

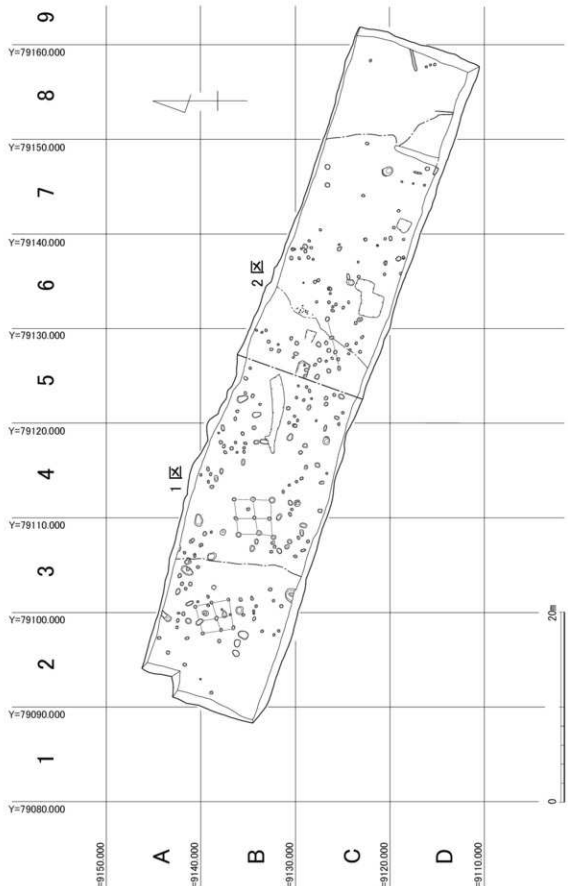
志手町遺跡の基本層序を第６・７図に示す。調査区は１区と２区に分かれるが、基本的な層序は共通する。

第Ⅰ層は表土及び盛土層である。調査地は、かつては工場用地となっており、その際に一帯を1.4m程度盛り上げている。第Ⅰ層は５層に細分でき、Ⅰ-1層は黄灰色土の表土層で下部に暗褐色土を含む。Ⅰ-2層は灰色を呈する石灰岩砕石層である。Ⅰ-3層はⅠ-2層と同様に石灰岩の砕石層であるが、色調がやや白みを帯びた灰白色を呈する。この２つの砕石層は、Ⅰ-2層は２区の西半部から１区にかけて、Ⅰ-3層は２区の東半部に認められ、上下に重なることはない。また厚みもほぼ同じであることから、わずかな色調差はあるものの基本的には同一層である。Ⅰ-4層は石灰岩角礫の混じる黄褐色土で、２区の東半部に堆積が認められる。Ⅰ-5層は暗褐色土混りの石灰岩角礫層で、Ⅰ-4層とは対照的に２区の西半部から１区にかけて堆積する。この２つの石灰岩角礫層も、Ⅰ-2・Ⅰ-3層の砕石層と同様に同一の形成要因とみられる。

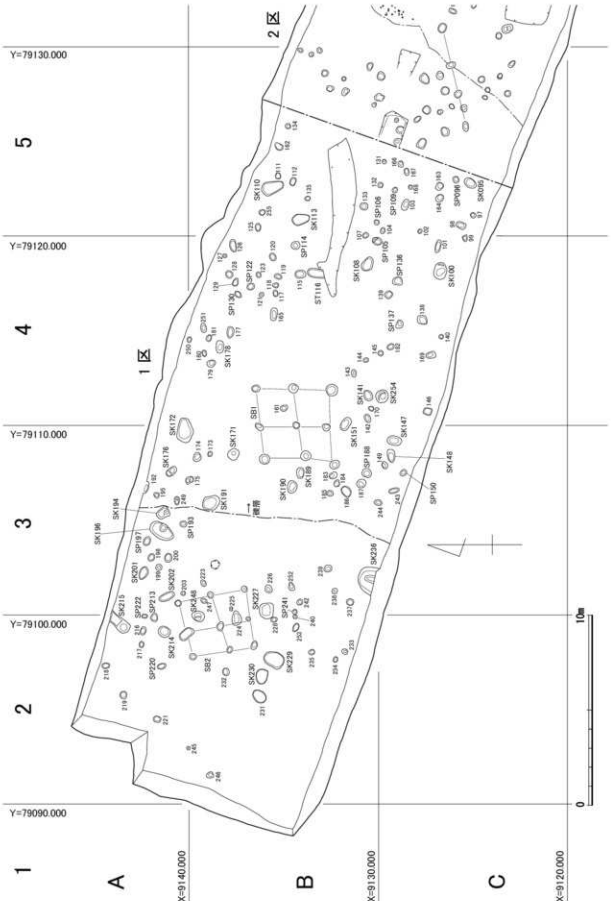
第Ⅱ層は黒褐色土で、盛土前の耕作土層である。従って、盛土前の地盤はこの層の上面の、標高約4.2m前後であることが分かる。この層は20～25cm程度の厚みをもつ。第Ⅲ層は暗褐色土で、炭を含みやや粘性を帯びる。中世・近世の遺物包含層であるが、遺物の量は少なく、多くは遺構検出面あたりから出土することから、上部は

重機を使って除去した。層の厚みは一様ではないが、約20～50cm程度である。第Ⅳ層は基盤層で、この上面が遺構検出面となる。第Ⅳ層は大きく２つあり、沖積層である褐色土層をⅣ-1層、暗褐色土で礫を主体とする層をⅣ-2層とした。この両者は1区・２区ともに認められるが、Ⅳ-1層は１区の西端付近や２区の東半部に分布し、Ⅳ-2層は１区の東半部から２区の西側で認められる。

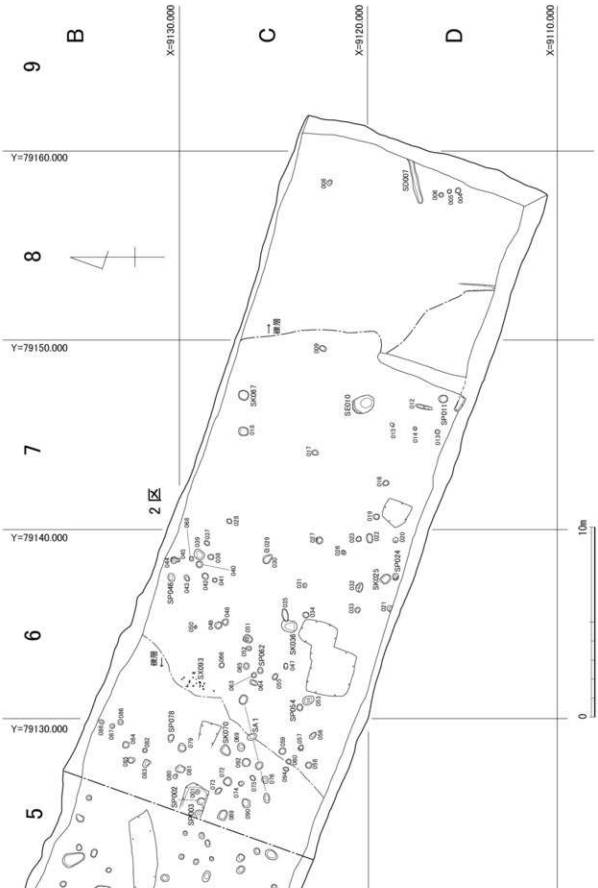
全体的にⅣ-1層が分布するところでは遺構が少なく、Ⅳ-2層が分布するエリアでは遺構が濃密に展開する。



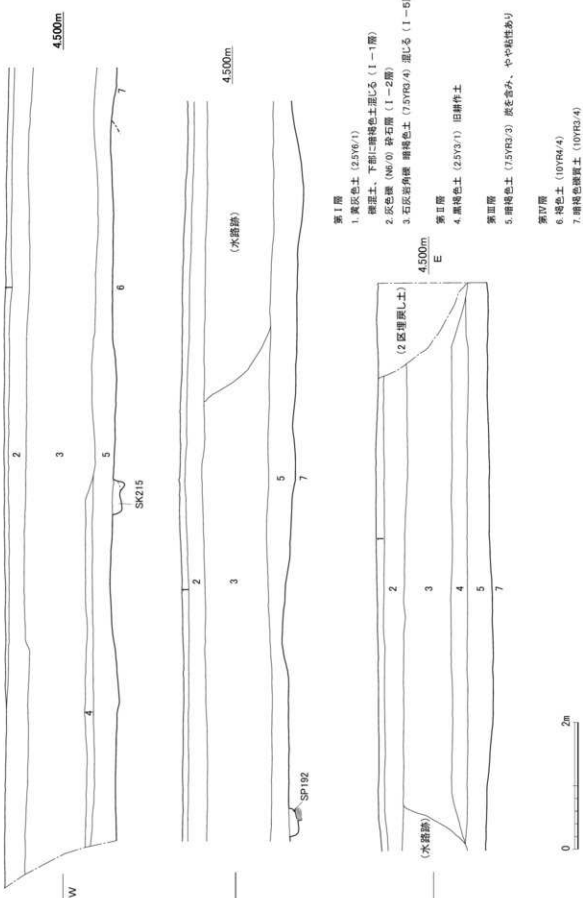
第３図　志手町遺跡遺構配置図（1/400）



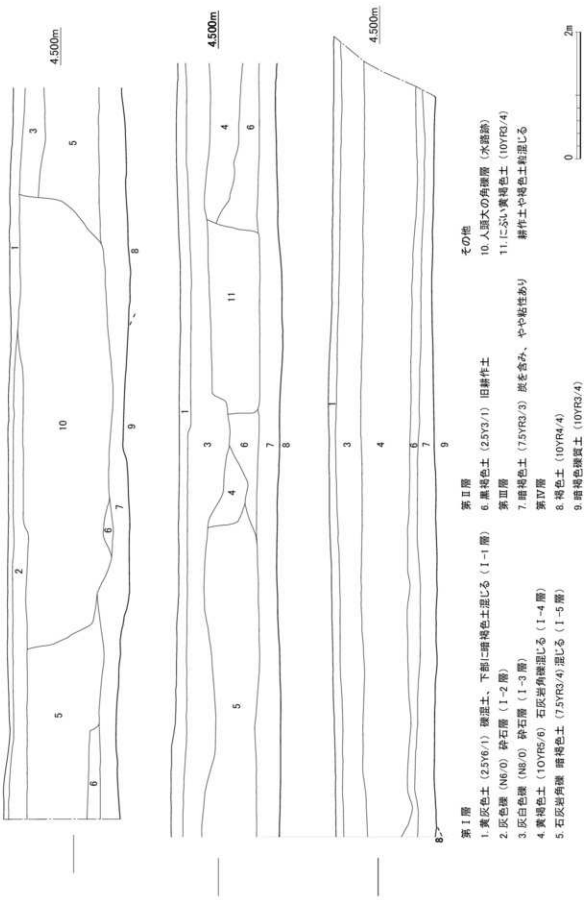
第４図　志手町遺跡１区遺構配置図（1/200）



第５図　志手町遺跡２区遺構配置図（1/200）



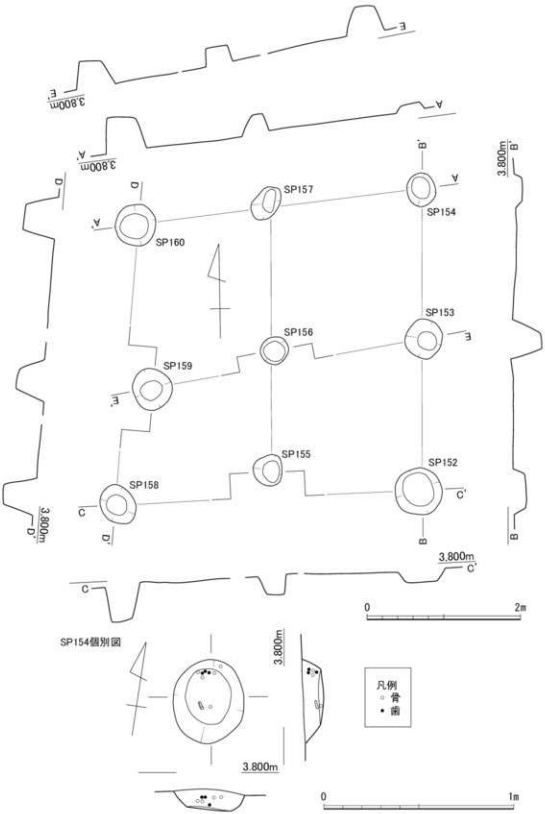
第６図　志手町遺跡１区土層断面図（1/60）



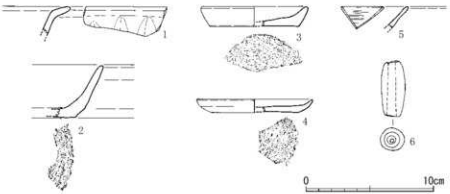
第７図　志手町遺跡２区土層断面図（1/60）

第３節　遺構と遺物

志手町遺跡の発掘調査で確認された遺構は、掘立柱建物、柵列、井戸、土坑墓、土坑、溝、遺物集中ブロック、柱穴である。遺構の分布状況としては、１区及び２区の西半部は比較的遺構密度が高いが、２区東半部では



第８図　志手町遺跡SB1実測図（1/50）



第９図　志手町遺跡SB1出土遺物実測図（1/3）

遺構が希薄となる。以下、種別ごとに遺物の出土した遺構、特徴的な遺構を中心に報告する。なお、すべての遺構の種別や規模、埋土、出土遺物等の概要は、巻末の遺構一覧表にまとめているので参照されたい。

（１）掘立柱建物

SB1（第８図）

１区のB3・B4グリッドで検出した掘立柱建物で、SP152～SP160の９基の柱穴で構成する、東西２間×南北２間の総柱建物である。柱穴の間隔や各柱穴列の軸線が必ずしも整合せずやや歪な並びではあるが、柱穴の配置や規模、埋土の共通性等特徴から建物跡と判断した。各柱穴間の柱間距離は約1.6～2.2mとばらつきがある。柱穴列の軸線は、南北方向では、東側及び中央の軸線がほぼ真北をとるのに対し、西側はN-5.5°-Eとやや東に振れる。東西方向では北側がN-83°-E、中央がN-80°-E、南側がN-87.5°-Eと、全体に少し北に振れる。建物の面積は約19.2㎡である。北東隅の柱穴SP154では、内部から骨の小片や歯の出土が認められた。その他、遺物は各柱穴から土師器片が出土した他、SP153からは陶器、SP154からは土錘、SP157からは瓦器、SP159からは瓦質土器、SP160からは青磁が出土した。これらの出土遺物は13世紀後半～14世紀前半に位置づけられるが、細片を含むため、遺構の年代としては14世紀前半に比定する。

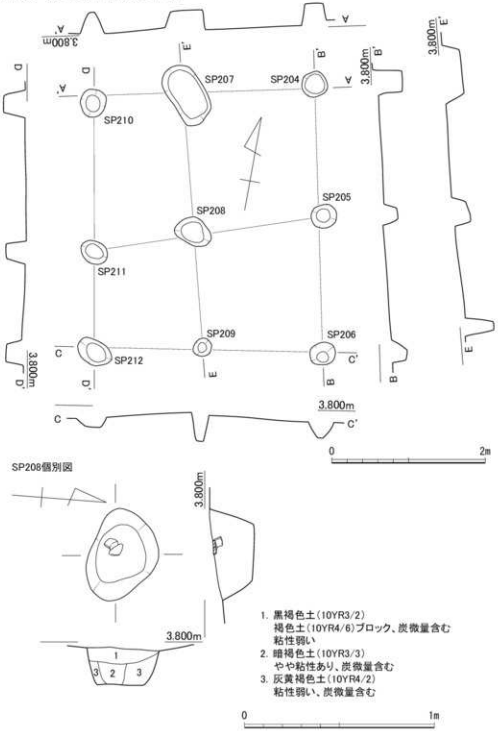
SB1出土遺物（第９図）

SB1を構成する各柱穴から出土した遺物を第９図に示した。１は中国龍泉窯系の青磁の鉢で、口縁部は外反し、外面には鎬を持つ蓮弁文を施す。２は土師器の坏で、底面には回転糸切り痕が残る。３・４は土師器の小皿で、３は底部から口縁部が短く立ち上がり、４は口縁部がやや内湾する。３・４ともに底面には回転糸切り痕が残る。５は瓦器椀で、内面に横位のヘラミガキを施す。和泉型瓦器椀の可能性が高い。６は土師質焼成の管状土錘である。これらの遺物のうち、１はSP160、２・４はSP159、３・５はSP157、６はSP154から出土した。

SB2（第10図）

1区のA2・A3・B2・B3グリッドで検出した掘立柱建物で、SP204～SP212の9基の柱穴で構成する、東西2間×南北2間の総柱建物である。SB1と同様に柱穴の間隔や各柱穴列の軸線が必ずしも整合しないが、柱穴の配置や埋土が黒褐色土を基調として共通性があることから建物跡と認定した。各柱穴間の距離は約1.3～2.0mとばらつきが大きい。柱穴列の軸線は南北方向では西側がN-9.5°-W、中央はN-14.5°-W、東側はN-12°-W、東西方向では北側がN-77.5°-E、中央はN-71°-E、南側はN-80.5°-Eとなる。建物の面積は約12.6㎡である。遺物はSP210とSP212を除き、土師器が出土した。特に中央のSP208では、検出面から第11図に示す土師器坏が底部を上にした逆位の状態で出土した。また、SP207からは陶器片も出土している。

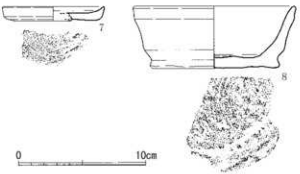
遺構の年代は、14世紀前半に位置づける。



第10図　志手町遺跡SB2実測図（1/50）

SB2出土遺物（第11図）

SB2を構成する柱穴から出土した遺物を第11図に示した。7は土師器小皿で、底部から口縁部が短く立ち上がる。底面には回転糸切り痕が残る。SP205からの出土である。8は土師器の坏で、口縁部は外に開きながら立ち上がり、器壁には凹凸が見られる。器高は4.9cmと高い。底面には回転糸切り痕が残る。SP208からの出土である。

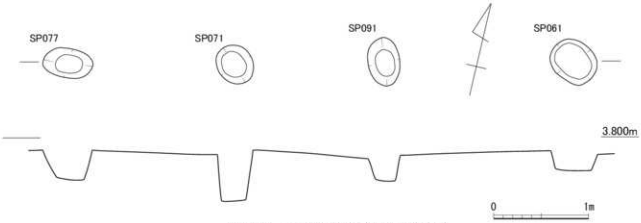


第11図　志手町遺跡SB2出土遺物実測図（1/3）

（2）柵列

SA1（第12図）

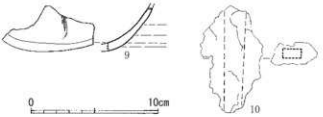
2区のC5・C6グリッドで検出した柵列である。SP061・SP071・SP077・SP091の4基のピットが東西方向に直線的に並ぶもので、各柱穴の芯々間の距離は西から順に1.72m、1.60m、1.98mを測り、SP091からSP061の間がやや離れている。主軸方向はN-76.5°-Eで、東西方向からやや北に振れている。埋土は暗褐色土又は黒褐色土で、微量と少量の程度の差はあるがいずれも炭を含む。遺物はSP061から土師器、SP071から土師器、鉄製品、SP077から青磁、土師器が出土しているが、SP091からは遺物が出土しなかった。SP077出土の青磁碗は12～13世紀代のものであるが、周囲の遺構に比べ古い年代を示すので、これをもって年代を決めるのは難しい。



第12図　志手町遺跡SA1実測図（1/40）

SA1出土遺物（第13図）

SA1を構成する柱穴から出土した遺物を第1図に示した。9は中国龍泉窯系の青磁碗である。口縁部及び底部を欠くが、内面にはわずかに劃花文が認められる。SP077からの出土である。10は断面形が長方形を呈する鉄製品で、釘であろうか。SP071からの出土である。

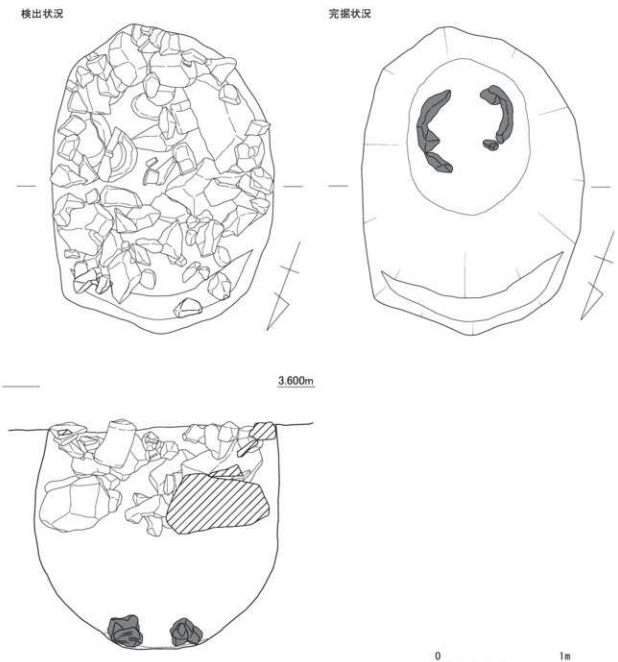


第13図　志手町遺跡SA1出土遺物実測図（1/3）

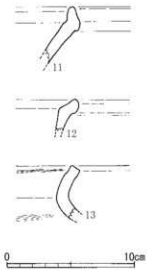
（3）井戸

SE10（第14図）

2区のC7グリッドで検出した、井戸と考えられる遺構である。平面形状は楕円形状を呈し、長辺2.47m、短辺1.76m、深さ1.76mを測る。埋土は暗褐色を呈する粘質土で、微量の炭を含む。遺構の上部には、約0.9mの厚みで多量の礫や遺物が混入しており、下部が埋没した後に廃棄土坑として利用されたものと考えられる。この礫や遺物を除去した後に下部を掘り下げたところ、底面から弧状を呈する木材が出土した。本来は円形を呈していたと思われ、内部を刳り抜いた木製品を据えて井戸側としていた可能性が高い。遺物は土師器、瓦質土器、東播系須恵器、石臼が出土しているが、大部分は検出面から上半部にかけての出土で、下部からの出土はほとんど認められなかった。出土遺物から、14世紀代の遺構と考えられる。



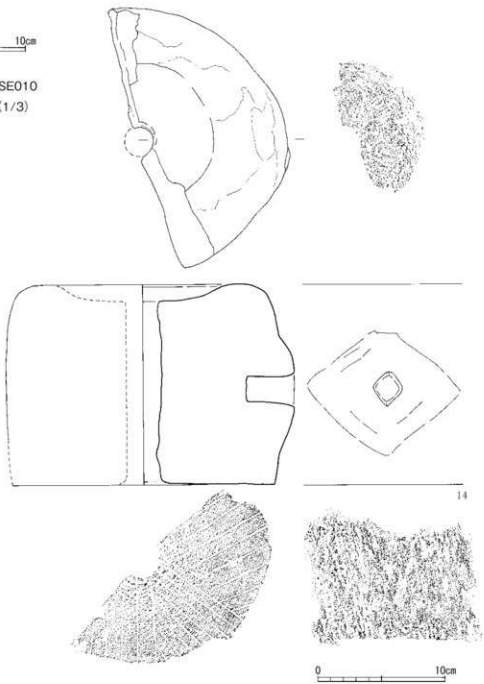
第14図　志手町遺跡SE010実測図（1/30）



第15図　志手町遺跡SE010出土遺物実測図①（1/3）

SE10出土遺物（第15・16図）

SE10出土遺物を第15・16図に示した。第15図は土器類である。11は東播系須恵器の捏鉢で、底部から外に開きながら立ち上がり、口縁部は内屈する。12は瓦質土器の鍋で、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。13は瓦質土器の甕で、内面に粗いハケ目を施す。第16図14は凝灰岩製の茶臼の上臼である。側面の１箇所を菱形状に陽刻し、その中央に挽き木を差し込むための方形の孔を穿つ。底面には摺目を刻む。摺目の主溝は６分画と思われ、副溝は７条である。側面及び上端面には粗いケズリの痕跡が残る。

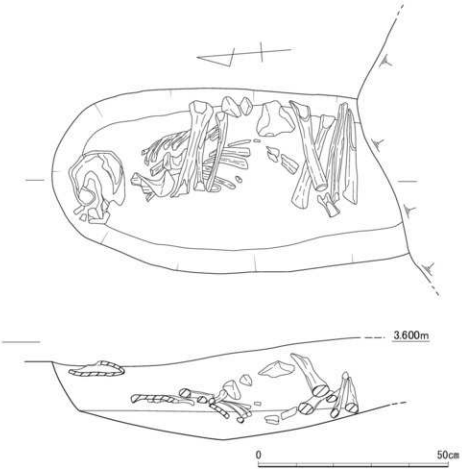


第16図　志手町遺跡SE010出土遺物実測図②（1/3）

（4）土坑墓

ST116（第17図）

1区のB4グリッドで検出した土坑墓である。南端部は攪乱により全体を確認できないが、平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.91m以上、短辺0.48m、深さ0.22mを測る。底面は平坦ではなく、中央が皿状に浅く凹む。埋土は砂混りの黒褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。この土坑内から埋葬人骨が出土した。人骨は頭位を北にとり、顔を西に向けた状態で、腕と足の骨をそれぞれ折り曲げた屈葬姿勢を取っている。人骨の分析はできていないが、大きさから成人であることは確実である。人骨の他には土師器の細片がわずかに出土しているが、明確な副葬品は認められない。また、鉄釘等も認められないことや、人骨が土坑の壁際いっぱいに埋葬されていることから、木棺ではなく土坑に直葬したものである可能性が高い。墓の年代は中世であることは間違いないが、図示できる遺物がなく詳細な時期は明らかにできない。。



第17図　志手町遺跡ST116実測図（1/10）

（5）土坑

志手町遺跡で検出された土坑は、その多くが小規模なもので、柱穴との区別が難しいものを含む。ここで土坑として扱うものは、長辺が0.50m以上のものを便宜上土坑として区別しているが、一部は0.50m以上でも形状から柱穴と判断できるものは除外している。あくまで便宜上の区別であり、土坑とした遺構の中にも柱穴としての機能を持つものを含む可能性があることを断っておきたい。

SK036（第18図）

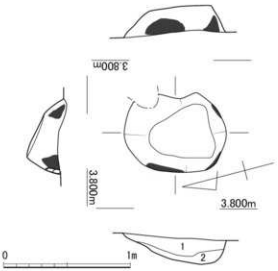
2区のC6グリッドで検出した土坑である。平面形状は東縁が凹む楕円形状を呈し、北東隅は土坑SK035に切られる。規模は長辺0.80m、短辺0.62m、深さ0.30mを測る。埋土は上下2層に分層でき、上層は小礫混りで炭をやや多く含む暗褐色土、下層は砂粒混りで炭を少量含む褐色土である。本土坑の特徴として、壁面に3箇所の焼土が確認される点が挙げられる。この焼土及び埋土に炭を含むことから、火を用いた何らかの施設であると推定されるが、その機能は特定できない。遺物は中世の土師器の小片が出土しているが、図示できるものはない。遺構の時期は中世であるが、詳細な時期は限定できない。

SK100（第19図）

1区のC4グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.90m、短辺0.66m、深さ0.45mを測る。内部は東壁際にステップ状の段が付く。埋土は黒褐色土で、炭・小礫を少量含む。遺物は中世の土師器、瓦質土器の細片が出土したが、図示できるものはない。従って中世に属する遺構ではあるが、時期の詳細は明らかにできない。

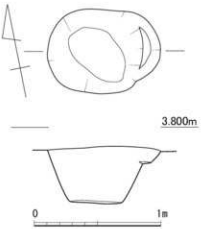
SK108（第20図）

1区のB4グリッドで検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長辺0.80m、短辺0.59m、深さ0.27mを測る。埋土は小礫を多量に含む黒褐色土で、微量の炭が混じる。遺物は中世の土師器の小片が出土したが、図示できるものはない。従って中世に属する遺構ではあるが、時期の詳細は明らかにできない。

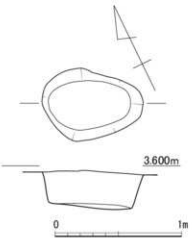


1. 暗褐色土（10YR3/3）
小礫混じりで炭をやや多く含む　粘性弱い
2. 褐色土（7.5YR4/4）
砂粒混じりで炭を少量含む　粘性弱い

第18図　志手町遺跡SK036実測図（1/30）



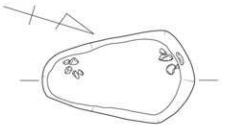
第19図　志手町遺跡SK100実測図（1/30）



第20図　志手町遺跡SK108実測図（1/30）

SK110（第21図）

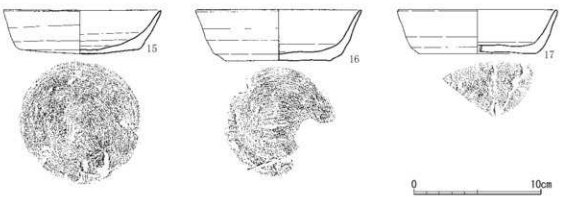
１区のB5グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北に細長い卵形を呈し、長辺1.21m、短辺0.73m、深さ0.24mを測る。埋土は砂質を呈する黒褐色土で、小礫および炭を微量含む。土坑内部は皿状の掘り込みで、土坑の両端部から土器片が出土した。特に土坑の北側では、ほぼ完形の土師器坏が底面付近から出土した。遺構の年代は14世紀中頃～後半に位置づける。



第21図　志手町遺跡SK110実測図（1/30）

SK110出土遺物（第22図）

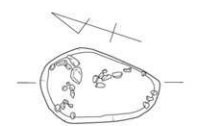
SK110出土遺物を第22図に示した。15～17は土師器坏である。15は底部から口縁部が直線的に立ち上がるのに対し、16・17は立ち上がりは内湾気味で、口縁はわずかに外反する。いずれも底面には回転糸切り痕が残り、16・17は板状圧痕も認められる。



第22図　志手町遺跡SK110出土遺物実測図（1/3）

SK113（第23図）

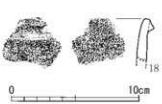
１区のB5グリッドで検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長辺0.95m、短辺0.59m、深さ0.27mを測る。埋土は砂・小礫混じりの暗褐色土で、微量の炭を含む。土坑内の中位から上部にかけて、5～20cm大の礫が出土しており、特に北半部ではややまとまって分布している。遺物は中世の土師器片の他、縄文土器が1点出土している。遺構の年代は中世であるが、遺物が細片のため詳細な時期までは明らかにできない。



第23図　志手町遺跡SK113実測図（1/30）

SK113出土遺物（第24図）

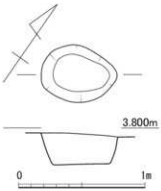
SK113出土遺物を第24図に示した。18は縄文土器の深鉢で、口縁部に接して断面三角形状の凸帯を貼り付ける。凸帯には刻み目を持たない無刻目凸帯文土器で、晩期末の上菅生B式に比定される。津久見市で縄文土器の出土はこれまで知られていないので、本例が初見となる。図示できるのはこの１点だけである。



第24図　志手町遺跡SK113出土遺物実測図（1/3）

SK141（第25図）

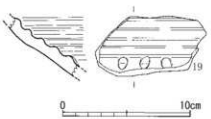
1区のB4グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕形を呈し、長辺0.60m、短辺0.45m、深さ0.26mを測る。埋土は黒褐色土で、小礫を少量、炭を微量含む。遺物は中世の土師器片の他、弥生土器が出土した。遺構の年代は中世であるが、遺物が細片のため詳細な時期までは明らかにできない。



第25図　志手町遺跡SK141実測図（1/30）

SK141出土遺物（第26図）

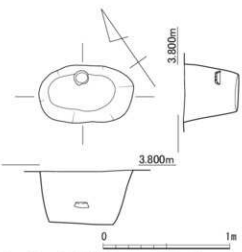
SK141出土遺物を第26図に示した。19は弥生土器の壺である。内傾する肩部に多条の凸帯を巡らし、下端の凸帯から垂下する短い浮文を小刻みに貼り付ける。弥生時代後期の安国寺式系の土器である。全体的に摩滅しており、他所からの混入品であると判断される。図示できるのはこの1点だけである。



第26図　志手町遺跡SK141出土遺物実測図（1/3）

SK151（第27図）

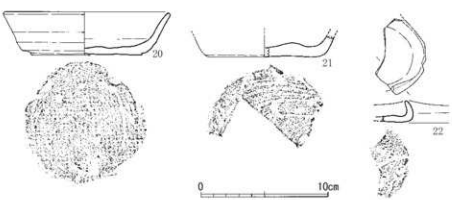
1区のB3・B4グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.75m、短辺0.46m、深さ0.45mを測る。埋土は小礫を多く含む黒褐色土で、微量の炭を含む。内部は逆台形状の掘り込みで、北壁際中央の中位から土師器坏1点が底面を上にした状態で出土した。出土遺物から、SK151は14世紀中頃～後半に位置づける。



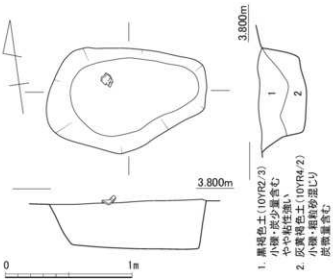
第27図　志手町遺跡SK151実測図（1/30）

SK151出土遺物（第28図）

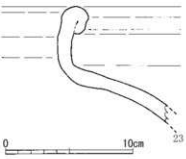
SK151出土遺物を第28図に示した。20・21は土師器坏である。20は底部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部はわずかに外反する。底面には回転糸切り痕が残る。21は底部破片で、底面に回転糸切り痕が残る。22は小皿状を呈するが、口縁部が内傾することから耳皿である。底面には回転糸切り痕が残る。



第28図　志手町遺跡SK151出土遺物実測図（1/3）



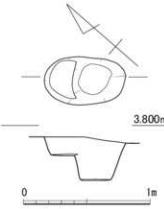
第29図　志手町遺跡SK172実測図（1/30）



第30図　志手町遺跡SK172
出土遺物実測図（1/3）

SK172（第29図）

１区のA3・A4グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや歪な長楕円形状を呈し、長辺1.31m、短辺0.89m、深さ0.38mを測る。埋土は上下2層に分層でき、上層は微量の小礫・炭を含む黒褐色土、下層は小礫・粗粒砂混じりの灰黄褐色土である。内部の掘り込みは西側は比較的緩やかであるのに対し、東壁側は急角度で立ち上がる。遺物は土師器の他、備前焼や東播系須恵器、瓦質土器が出土した。特に備前焼は第30図に示す甕の口縁部片が土坑の検出面から出土している。中世に属する遺構ではあるが、資料に乏しく詳細な時期までは明らかにできない。



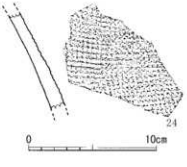
第31図　志手町遺跡SK176実測図（1/30）

SK172出土遺物（第30図）

SK172出土遺物を第30図に示した。23は備前焼の甕で、口縁端部は折り返し玉縁状に作る。SK172の検出面から出土した。図示できるのはこの１点だけである。

SK176（第31図）

１区のA3グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.64m、短辺0.38m、深さ0.34mを測る。埋土は少量の小礫・炭を含む黒褐色土である。内部は北半部にテラス状の段が付き、南側がピット状に深く掘り込む形状となる。遺物は土師器、瓦質土器片が出土した。中世に属する遺構ではあるが、年代を示す遺物に乏しく、詳細な時期までは明らかにできない。



第32図　志手町遺跡SK176
出土遺物実測図（1/3）

SK176出土遺物（第32図）

SK176出土遺物を第32図に示した。24は東播系須恵器の甕で、外面にタタキを施す。図示できるのはこの１点だけである。

SK186（第33図）

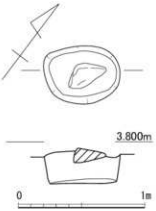
１区のB3グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.62m、短辺0.46m、深さ0.26mを測る。埋土は黒褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。土坑の上部から、30cm大の石灰岩塊が出土した。遺物は土師器が出土したが、細片のため図示できるものはない。遺構の年代は中世だが、詳細な時期までは明らかにできない。

SK190（第34図）

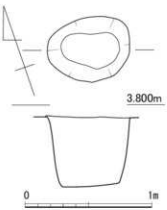
１区のB3グリッドで検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長辺0.65m、短辺0.52m、深さ0.56mを測る。埋土は少量の小礫と微量の炭を含む黒褐色土で、やや粘性を帯びる。遺物は土師器が出土している。遺構の年代は中世ではあるが、年代を特定できる資料に乏しく詳細な時期までは明らかにできない。

SK190出土遺物（第35図）

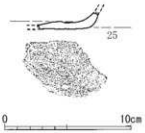
SK190出土遺物を第35図に示した。25は土師器坏の底部で、底面には回転糸切り痕が残る。図示できるのはこの１点だけである。



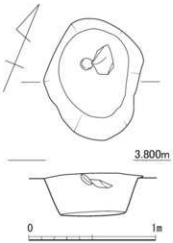
第33図　志手町遺跡SK186実測図（1/30）



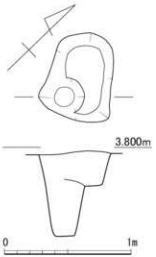
第34図　志手町遺跡SK190実測図（1/30）



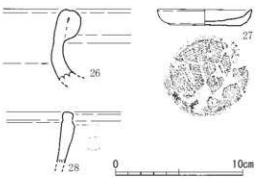
第35図　志手町遺跡SK190出土遺物実測図（1/3）



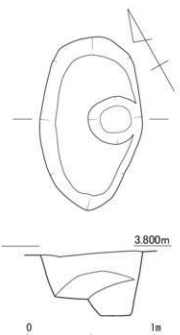
第36図　志手町遺跡SK191実測図（1/30）



第38図　志手町遺跡SK194実測図（1/30）



第37図　志手町遺跡SK191出土遺物実測図（1/3）



第39図　志手町遺跡SK196実測図（1/30）

SK191（第36図）

１区のＡ3グリッドで検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形を呈し、長辺0.62cm、短辺0.46cm、深さ0.33cmを測る。埋土は少量の褐色土ブロックが混じる暗褐色土で、小礫及び炭を少量含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器の他に、備前焼や瓦質土器が出土した。これらの出土遺物から、SK191の年代は14世紀頃に位置づける。

SK191出土遺物（第37図）

SK191出土遺物を第37図に示した。26は備前焼の甕で、口縁部は折り返し端部は玉縁状に作る。27は土師器小皿で、口縁部は内湾気味に短く立ち上がる。底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。28は瓦質土器の鍋で、口縁部の内外面にそれぞれ段が付く。

SK194（第38図）

１区のA3グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形状を呈し、長辺0.71m、短辺0.58m、深さ0.66mを測る。埋土は暗褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含む。土坑の南端部はピット状に一段深く掘り込んでい

る。遺物は土師器、瓦質土器が出土したが、いずれも細片のため図示できるものはない。出土遺物から中世の遺構と判断するが、詳細な時期までは明らかにできない。

SK196（第39図）

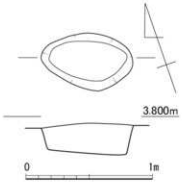
1区のA3グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北に細長い長楕円形を呈し、長辺1.37m、短辺0.82m、深さ0.50mを測る。埋土は微量の小礫・炭を含む黒褐色土である。土坑の東辺中央壁際にはピット状の掘り込みを伴う。遺物は土師器が出土したが、細片のため図示できるものはない。中世の遺構と判断するが、詳細な時期までは明らかにできない。

SK201（第40図）

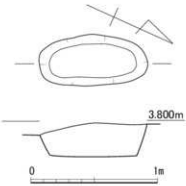
1区のA3グリッドで検出した土坑である。平面形状は東西方向に長い長楕円形状を呈し、長辺0.73m、短辺0.45m、深さ0.25mを測る。遺物は土師器が出土したが、細片のため図示できるものはない。中世の遺構と判断するが、詳細な時期までは明らかにできない。

SK202（第41図）

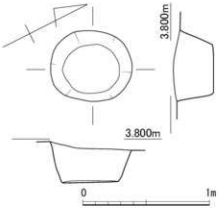
1区のA3グリッドで検出した土坑である。平面形状は南北方向に細長い楕円形状を呈し、長辺0.86m、短辺0.41m、深さ0.26mを測る。埋土は灰黄褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器が出土したが、細片のため図示できるものはない。中世の遺構と判断するが、詳細な時期までは明らかにできない。



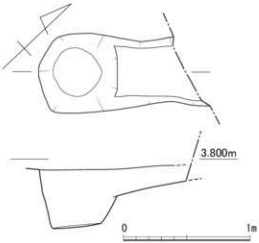
第40図　志手町遺跡SK201実測図（1/30）



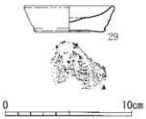
第41図　志手町遺跡SK202実測図（1/30）



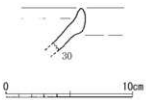
第42図　志手町遺跡SK214実測図（1/30）



第44図　志手町遺跡SK215実測図（1/30）



第43図　志手町遺跡SK214出土遺物実測図（1/3）



第45図　志手町遺跡SK215出土遺物実測図（1/3）

SK214（第42図）

１区のA2グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長辺0.65m、短辺0.56m、深さ0.33mを測る。埋土は暗褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器が出土した。遺構の年代を明かにできる資料に乏しいが、第43図の遺物から15世紀前半頃の可能性が考えられる。

SK214出土遺物（第43図）

SK214出土遺物を第43図に示した。29は土師器の小皿である。口縁部は短く立ち上がり、底部の器壁は厚みがある。底面には回転糸切痕が残る。

SK215（第44図）

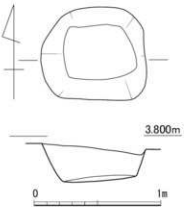
１区のA2・A3グリッドで検出した土坑である。北側は調査区外に続くため全体を明らかにできないが、検出範囲で平面形状は長楕円形状を呈し、長辺1.26m以上、短辺0.62m、深さ0.51mを測る。埋土は黒褐色土で、少量の小礫と炭を含む。土坑内部は南端が円形に一段深く掘り込み、北半部はなだらかなテラス状を呈する。遺物は土師器の他、東播系須恵器や鉄塊状の鉄製品が出土した。遺構の年代は14世紀代である。

SK215出土遺物（第45図）

SK215出土遺物を第45図に示した。30は東播系須恵器の捏鉢である。体部は外に開き、口縁部は玉縁状となる。図示できるのはこの１点だけである。

SK227（第46図）

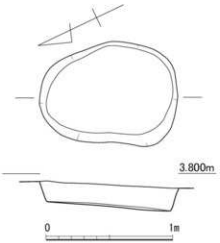
１区のB2・B3グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形状を呈し、長辺0.83m、短辺0.74m、深さ0.31mを測る。埋土は黒褐色土で、小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器、瓦質土器が出土したが、いずれも細片のため図示できるものはない。従って、中世に属する遺構ではあるが、その詳細な時期は明らかにできない。



第46図　志手町遺跡SK227実測図（1/30）

SK229（第47図）

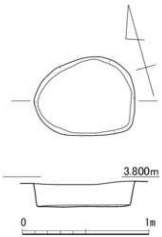
１区のB2グリッドで検出した土坑である。SK230・SK231と３基の土坑が近接している。SK229は平面形状が卵形を呈し、長辺1.08m、短辺0.79m、深さ0.25mを測る。埋土は黒褐色土で少量の小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。内部は底面が北から南に向かって若干傾斜する。遺物は須恵器、土師器、瓦質土器が出土したが、いずれも細片のため図示できるものはない。中世に属する遺構ではあるが、その詳細な時期までは明らかにできない。



第47図　志手町遺跡SK229実測図（1/30）

SK230（第48図）

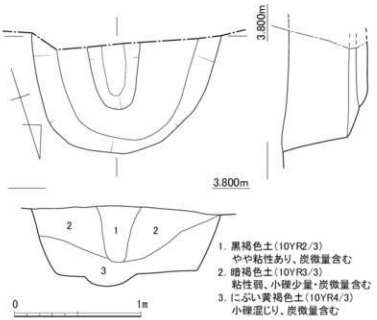
１区のB2グリッドで検出した土坑で、SK229・SK231と近接して位置している。平面形状はSK229に似た卵形で、長辺0.80m、短辺0.61m、深さ0.19mと、SK229よりも一回り小さい。埋土は黒褐色土で、微量ながら小礫と炭を含み、やや粘性を帯びる。土坑内部は土坑上面と床面の大きさにあまり差がなく、壁面は急角度で立ち上がる。遺物は土師器が出土したが、いずれも細片のため図示できるものはない。そのため中世に属する遺構ではあるが、その詳細な時期までは明らかにできない。



第48図　志手町遺跡SK230実測図（1/30）

SK236（第49図）

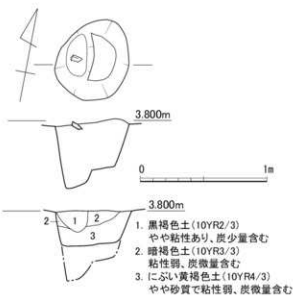
１区のB3グリッドで検出した土坑である。南半部は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、平面形状は半円形状を呈し、長辺1.50m、短辺0.87m以上、深さ0.65mを測る。埋土は3層に分層でき、中央にピット状に掘り込む土層が確認できる。その位置に対応するように、底面に溝状の凹みが認められる。遺物は陶器、土師器、瓦質土器が出土しているが、いずれも細片のため図示できるものはない。そのため、中世に属する遺構ではあるが、その詳細な時期までは明らかにできない。



第49図　志手町遺跡SK236実測図（1/30）

SK248（第50図）

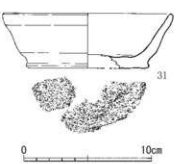
1区のA2・A3グリッドで検出した土坑で、その位置は掘立柱建物SB2を構成する柱穴の区画内にあたる。平面形状は卵形を呈し、長辺0.67m、短辺0.56m、深さ0.55mを測る。埋土は３層確認でき、土坑埋土である２層の暗褐色土・３層のにぶい黄褐色土を切ってピット状の1層黒褐色土が掘り込んでいる。土層断面図作図後に完掘したところ、この１層の部分に合うように、西半部の図化ラインより奥側が一段深く掘り込むことが分かった。従ってこの掘り込みは土坑埋没後に掘り込むものであると分かる。遺物は土師器が出土しており、検出面からは第51図に示す土師器坏が突き刺さるように出土した。遺物の出土状況から遺構の年代を特定するにはやや難があるが、14世紀後半に位置付けたい。従って、SB2の廃絶後に構築された遺構である。



第50図　志手町遺跡SK248実測図（1/30）

SK248出土遺物（第51図）

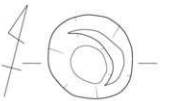
SK248出土遺物を第51図に示した。31は土師器の坏である。口縁部は外に開きながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。器壁は体部下半が厚みを持ち、口縁部にかけて細くなる。底面には回転糸切り痕が残る。



第51図　志手町遺跡SK248出土遺物実測図（1/3）

SK254（第52図）

1区のB4グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長辺0.72m、短辺0.67m、深さ0.40mを測る。内部は南西側が一段深く掘り込み、北東側にはテラス状の段が付く。遺構の規模から土坑に分類したが、こうした構造から本来の機能としては柱穴である可能性が高い。遺物は土師器が出土したが、細片のため図示できるものはない。そのため、中世に属する遺構ではあるが、詳細な時期までは明らかにできない。



第52図　志手町遺跡SK254実測図（1/30）

その他の土坑（第53図）

SK025

2区のC6グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形状を呈し、長辺0.60m、短辺0.52m、深さ0.19mを測る。埋土は小礫及び微量の炭を含む暗褐色土で、やや粘性を帯びる。遺物は土師器片が出土した。

SK067

2区のC7グリッドで検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長辺0.54m、短辺0.51m、深さ0.17mを測る。埋土は暗褐色土で、小礫及び微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器片が出土した。

SK070

2区のC5グリッドで検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長辺0.56m、短辺0.47m、深さ0.27mを測る。埋土は黒褐色土で、多量の礫及び微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器、鉄製品の他、検出面近くから東播系須恵器甕の胴部片が出土した。概ね14世紀代の遺構と考えられる。

SK095

1区のC5グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.70m、短辺0.48m、深さ0.31mを測る。埋土は3層に分層され、西半部に1層が掘り込む。出土遺物はなく時期は明らかにできない。

SK147

1区のB3グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長辺0.77m、短辺0.49m、深さ0.51mを測る。埋土は黒褐色土で多量の礫を含む。遺物は土師器、瓦質土器の小片が出土した。

SK148

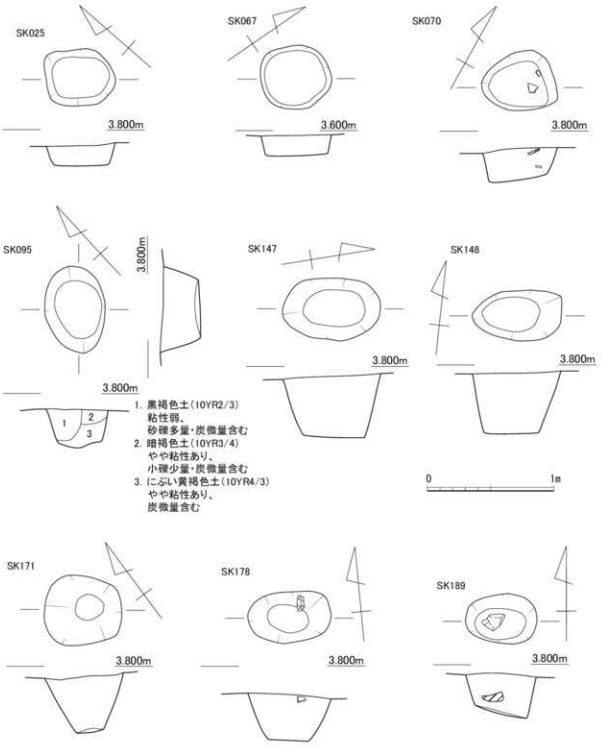
1区のB3グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長辺0.71m、短辺0.40m、深さ0.49mを測る。埋土は黒褐色土で、小礫及び微量の炭を含む。遺物は土師器片が出土した。

SK171

1区のB3グリッドで検出した土坑である。平面形状は隅丸方形状で、長辺0.61m、短辺0.56m、深さ0.43mを測る。埋土は小礫・微量の炭を含む黒褐色土で、やや粘性を帯びる。遺物は土師器、瓦質土器が出土した。

SK178

1区のA4グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長辺0.66m、短辺0.41m、深さ0.38mを測る。埋土は暗褐色土で、小礫及び微量の炭を含む。遺物は検出面近くから土師器片が出土した。



第53図　志手町遺跡その他の土坑実測図（1/30）

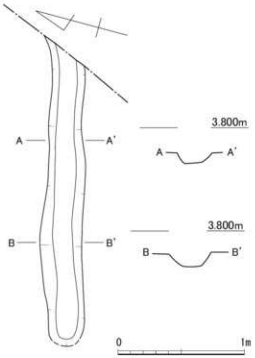
SK189

1区のB3グリッドで検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長辺0.57m、短辺0.40m、深さ0.35mを測る。埋土は黒褐色土で、小礫及び微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。土坑内から30cm大の礫が出土した他、遺物としては土師器片が出土した。

（6）溝

SD007（第54図）

2区のC8・D8グリッドで検出した溝状遺構である。東西方向に延びるもので、東端部は調査区外に続くため全体の規模は明らかにできないが、長さ2.25m以上、幅0.33m、深さ0.15mを測る。埋土は灰黄褐色土で、粗粒砂と少量の炭が混じる。出土遺物はなく、遺構の時期は明らかにできない。

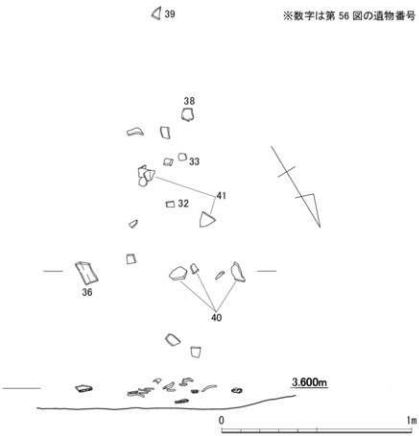


第54図　志手町遺跡SD007実測図（1/30）

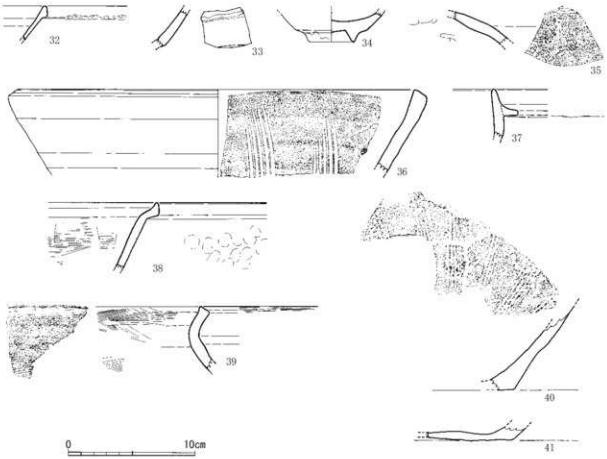
（7）遺物集中ブロック

SX093（第55図）

2区のB6グリッドで検出した遺物集中ブロックである。遺跡全体として遺構検出面での遺物出土は散発的であるが、SX093は東西約0.9m、南北約1.8mの範囲に、陶磁器、瓦質土器等の遺物がややまとまって出土したことから遺構として扱った。出土遺物では瓦質土器摺鉢が比較的目立つ。また、特筆される遺物として中国産天目碗が出土している。遺構の周囲を精査して掘り込みが伴うかの確認を行ったが、下部施設は認められなかった。



第55図　志手町遺跡SX093実測図（1/20）



第56図　志手町遺跡SX093出土遺物実測図（1/3）

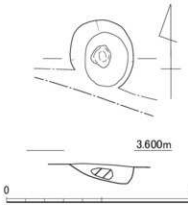
SX093出土遺物（第56図）

SX093出土遺物を第56図に示した。32は白磁の玉縁碗である。33は施釉陶器の碗で、胴部下半は露胎となり、上部に黒色の釉薬を二度掛けする。こうした特徴から中国産の天目碗であると判断される。34も天目碗で、胎土がやや軟質ではあるがこれも中国産であろう。35は古瀬戸梅瓶の肩部で、外面に自然釉が付着するが、大部分は剥落している。36は備前焼の摺鉢で、口縁端部は方形におさめ、内面には５条１単位の摺目を施す。37は瓦質土器の羽釜で、口縁部は内傾し、頸部に鍔部を貼り付ける。38は瓦質土器の鍋で、口縁は外反し、端部は三角形状に肥厚する。内面には横位のハケ目を施し、外面には成形時の指頭圧痕が顕著に残る。39は瓦質土器の甕である。40・41は瓦質土器の摺鉢で、同一個体の可能性が高いが接合しない。全体的に二次焼成を受けている。

（8）柱穴状遺構

SP002（第57図）

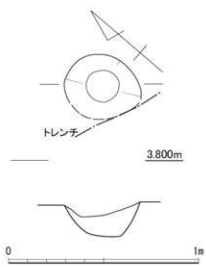
平成29年度の立会調査で検出したピットで、本調査区では２区のB5グリッドにあたる。平面形状は略円形で、南端部はトレンチの肩にかかるため規模は明確ではないが、長辺0.43m、短辺0.33m程度、深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色土である。内部には中央部に礎盤石となる礫を据えていた。礎盤石は柱を受ける上端部を平坦な面となるように加工している。礎盤石を持つことから建物を構成する遺構である可能性が高いが、SP002以外に礎盤石を伴うピットは確認できず、また掘立柱建物となるような規則的な柱穴配置は認められなかった。なお、本遺構から出土遺物はなく、詳細な時期は明らかにできない。



第57図　志手町遺跡SP002実測図（1/20）

SP003（第58図）

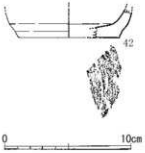
平成29年度の立会調査で検出したピットで、本調査区では2区のB5グリッドにあたる。平面形状は卵形を呈し、長辺0.41m、短辺0.25m程度、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器坏が1点出土した。遺構の年代は明確ではないが、14世紀後半～15世紀前半に位置づける。



第58図　志手町遺跡SP003実測図（1/20）

SP003出土遺物（第59図）

SP003出土遺物を第59図に示した。42は小型の土師器の坏で、口縁部を欠く。底面には回転糸切り痕が残る。図示できるのはこの１点だけである。



第59図　志手町遺跡SP003出土遺物実測図（1/3）

SP046（第60図）

２区のB6グリッドで検出したピットである。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.45m、短辺0.36m、深さ0.33mを測る。埋土は暗褐色土で、小礫と少量の炭を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器、陶器が出土しており、第61図に示す陶器はピットの上部から出土した。

SP046出土遺物（第61図）

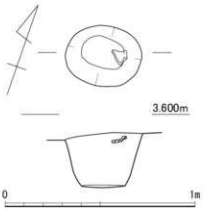
SP046出土遺物を第61図に示した。43は焼締陶器の甕で、全体的に摩滅している。口縁部を欠失するが、常滑の製品であろう。

SP054（第62図）

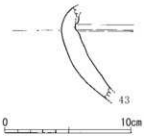
２区のC6グリッドで検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、長辺0.36m、短辺0.32mを測り、深さは0.06mと浅い。埋土は暗褐色土で、多量の粗粒砂が混じり、微量の炭を含む。内部の掘り込みは皿状を呈する。遺物はピットの検出面で第63図に示す砥石が出土したが、その他の土器類は出土しなかった。そのため遺構の詳細な時期は明らかにできないが、中世の遺構である可能性が高い。

SP054出土遺物（第63図）

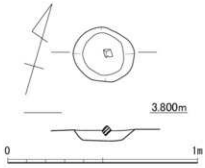
SP054出土遺物を第63図に示した。44は砥石で、SP054の検出面から出土した。上下両端を欠くが、側面の4面全てが使用により平滑化している。また、全体的に赤色顔料が付着しており、赤色顔料を使用した何らかの生産具、あるいは顔料そのものの生産に使用された可能性が高い。



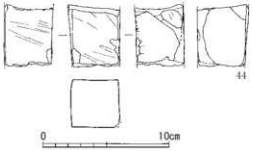
第60図　志手町遺跡SP046実測図（1/20）



第61図　志手町遺跡SP046出土遺物実測図（1/3）



第62図　志手町遺跡SP054実測図（1/20）



第63図　志手町遺跡SP054出土遺物実測図（1/3）

SP058（第64図）

２区のC5グリッドで検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、長辺0.35m、短辺0.33m、深さ0.16mを測る。埋土は暗褐色土で、礫及び微量の炭を含む。内部は逆台形状の掘り込みで、中央付近の中位の深さから20cm大の礫が出土した。遺物は土師器、鉄釘が出土している。中世に属する遺構ではあるが、年代を特定できる資料に乏しく、詳細な時期までは明らかにできない。

SP058出土遺物（第65図）

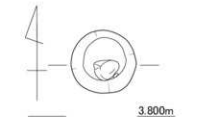
SP058出土遺物を第65図に示した。45は鉄釘で、断面は長方形を呈する。図示できるのはこの１点だけである。

SP062（第66図）

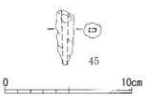
２区のC6グリッドで検出したピットである。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.34m、短辺0.29m、0.31mを測る。埋土は２層確認されるが、大部分は１層の暗褐色土で、２層の褐色土は底面壁際にわずかに認められる。遺物は土師器が出土した。遺構の年代は14世紀前半に位置づける。

SP062出土遺物（第67図）

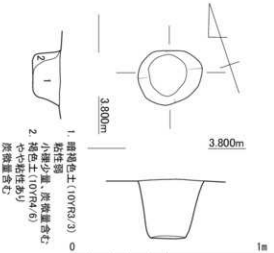
SP062出土遺物を第67図に示した。46は土師器の坏で、口縁部は直線的に外に開く。器壁は口縁部のやや下が膨らみ、端部は細くおさめる。底面には回転糸切り痕が残る。図示できるのはこの１点だけである。



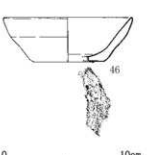
第64図　志手町遺跡SP058実測図（1/20）



第65図　志手町遺跡SP058出土遺物実測図（1/3）



第66図　志手町遺跡SP062実測図（1/20）



第67図　志手町遺跡SP062出土遺物実測図（1/3）

SP078（第68図）

２区のB5グリッドで検出したピットである。平面形状は卵形を呈し、長辺0.45m、短辺0.31m、深さ0.51mを測る。埋土は多量の礫が混じる黒褐色土で、微量の炭を含む。遺物は青磁、土師器が出土した。第79図に示す青磁碗は13世紀代のものであるが、細片のためこれが直接年代を示すかは明確ではない。13世紀後半から14世紀頃に位置づけておきたい。

SP078出土遺物（第69図）

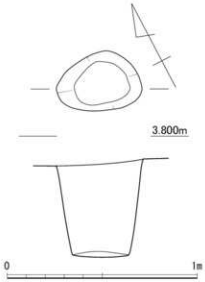
SP078出土遺物を第69図に示した。47は青磁碗で、外面には鎬のある蓮弁文を施す。図示できるのはこの1点だけである。

SP105（第70図）

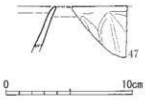
１区のB4グリッドで検出したピットである。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.53m、短辺0.40m、深さ0.34mを測る。埋土は黒褐色土で、小礫と微量の炭を含む。内部は北端部にステップ上の段が付き、南半部が一段深く掘り込む構造となる。遺物は青磁、土師器が出土した。遺構の年代は14世紀前半に位置づける。

SP105出土遺物（第71図）

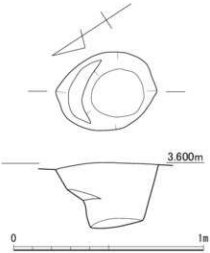
SP105出土遺物を第71図に示した。48は青磁碗で、内面に除刻文を施す。49は土師器の坏で、器壁は厚く、胴部の中位が膨らみ口縁部は細くおさめる。



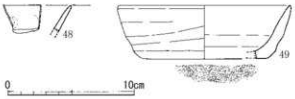
第68図　志手町遺跡SP078実測図（1/20）



第69図　志手町遺跡SP078出土遺物実測図（1/3）



第70図　志手町遺跡SP105実測図（1/20）



第71図　志手町遺跡SP105出土遺物実測図（1/3）

SP106（第72図）

１区のB5グリッドで検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、長辺0.30m、短辺0.28m、深さ0.19mを測る。埋土は黒褐色土で、小礫及び微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。内部は逆台形状の掘り込みで、ピット南側の壁際から、第73図に示す土師器坏が出土した。遺構の年代は14世紀前半に位置づける。

SP106出土遺物（第73図）

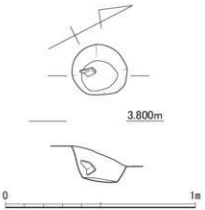
SP106出土遺物を第73図に示した。50は土師器坏で、口縁部は外に直線的に開く。底面には回転糸切り痕が残る。図示できるのはこの1点だけである。

SP109（第74図）

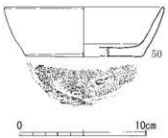
１区のB5グリッドで検出したピットである。平面形状は卵形を呈し、長辺0.33m、短辺0.28m、深さ0.19mを測る。埋土は小礫・砂混じりの暗褐色土で、微量の炭を含む。内部は逆台形状の掘り込みで、壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。遺物は土師器と鉄釘が出土した。中世に属する遺構ではあるが、年代を特定できる遺物に乏しく、詳細な時期までは明らかにできない。

SP109出土遺物（第75図）

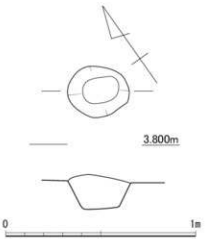
SP109出土遺物を第75図に示した。51は鉄釘で、断面は長方形を呈する。図示できるのはこの1点だけである。



第72図　志手町遺跡SP106実測図（1/20）



第73図　志手町遺跡SP106出土遺物実測図（1/3）

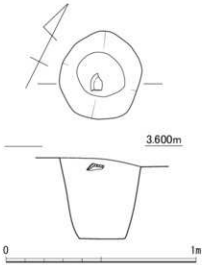


第74図　志手町遺跡SP109実測図（1/20）

第75図　志手町遺跡SP109出土遺物実測図（1/3）

SP114（第76図）

1区のB4グリッドで検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、長辺0.47m、短辺0.42m、深さ0.47mを測る。埋土は小礫が少し混じる黒褐色土で、少量の炭と微量の焼土を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器の他に鉄滓が出土しており、特ピット中央の上位から第77図に示す土師器小皿が底面を上にした状態で出土した。遺構の時期は14世紀後半から15世紀前半に位置づける。



第76図　志手町遺跡SP114実測図（1/20）

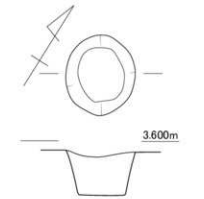
SP114出土遺物（第77図）

SP114出土遺物を第77図に示した。52は土師器小皿で、底部から口縁部が短く立ち上がり、器壁は全体に厚みがある。底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。図示できるのはこの1点だけである。

第77図　志手町遺跡SP114出土遺物実測図（1/3）

SP122（第78図）

1区のB4グリッドで検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、長辺0.42m、短辺0.37m、深さ0.24mを測る。埋土は暗褐色土で、小礫及び微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。内部形状は逆台形状を呈する。遺物は土師器が出土した。遺構の年代は14世紀代の可能性が高い。



第78図　志手町遺跡SP122実測図（1/20）

SP122出土遺物（第79図）

SP122出土遺物を第79図に示した。53は土師器小皿で、底部から口縁部が短く立ち上がり、端部は細くおさめる。底面には回転糸切り痕が残る。図示できるのはこの1点だけである。

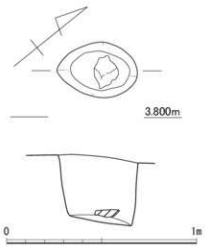
第79図　志手町遺跡SP122出土遺物実測図（1/3）

SP130（第80図）

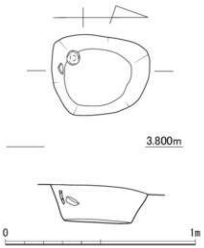
1区のB4グリッドで検出したピットである。平面形状は東西に細長い楕円形状を呈し、長辺0.43m、短辺0.29m、深さ0.37mを測る。埋土は暗褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含む。中央の底面近くから20cm大の角礫が1点出土した。遺物は土師器の他、東播系須恵器や焼土塊、弥生土器が出土した。中世に属する遺構ではあるが、年代を特定できる資料に乏しく、詳細な時期までは明らかにできない。

SP130出土遺物（第81図）

SP130出土遺物を第81図に示した。54は弥生土器甕の底部で、表面がやや摩滅しており、周囲からの混入品である。図示できるのはこの１点だけである。

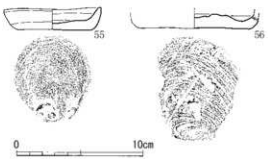


第80図　志手町遺跡SP130実測図（1/20）

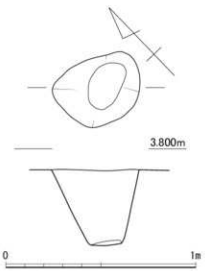


第82図　志手町遺跡SP136実測図（1/20）

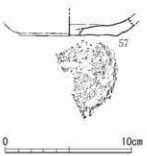
第81図　志手町遺跡SP130出土遺物実測図（1/3）



第83図　志手町遺跡SP136出土遺物実測図（1/3）



第84図　志手町遺跡SP137実測図（1/20）



第85図　志手町遺跡SP137出土遺物実測図（1/3）

SP136（第82図）

１区のB4グリッドで検出したピットである。平面形状は隅丸方形状を呈し、長辺0.51m、短辺0.53m、深さ0.20mを測る。埋土は多量の小礫と砂が混じる黒褐色土で、微量の炭を含む。内部は逆台形状の掘り込みで、南西隅部から第83図に示す完形の土師器小皿が出土した。遺構の年代は14世紀～15世紀前半に位置づける。

SP136出土遺物（第83図）

SP136出土遺物を第83図に示した。55は土師器小皿で、口縁部は短く立ち上がり、底面には回転糸切り痕が残る。56は土師器坏の底部で、底面に回転糸切り痕と板状圧痕が残る。

SP137（第84図）

１区のB4グリッドで検出したピットである。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長辺0.47m、短辺0.35m、深さ0.41mを測る。埋土は黒褐色土で、小礫及び微量の炭を含む。内部の掘り込みは、東側はやや傾斜が緩く、西側は急角度で壁が立ち上がる。遺物は土師器が出土した。年代を特定できる資料に乏しいが、14世紀後半～15世紀前半頃に位置づけられよう。

SP137出土遺物（第85図）

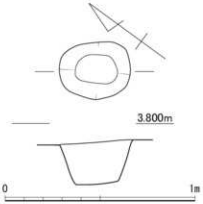
SP137出土遺物を第85図に示した。57は土師器の坏である。口縁部を欠くが、底部からの立ち上がりは内湾気味で、底面には回転糸切り痕が残る。

SP150（第86図）

１区のB3グリッドで検出したピットである。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.38m、短辺0.30m、深さ0.24mを測る。埋土は暗褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含む。内部は逆台形状に掘り込む、遺物は陶器、土師器、瓦質土器が出土した。中世に属する遺構ではあるが、年代を特定できる資料に乏しく、詳細な時期までは明らかにできない。

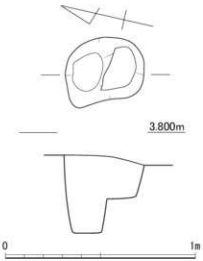
SP150出土遺物（第87図）

SP150出土遺物を第87図に示した。58は施釉陶器の天目碗である。SX093からは2点の天目碗が出土しており、いずれも中国産である。本資料も中国産である可能性が高い。

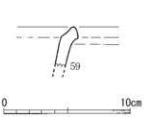


第86図　志手町遺跡SP150実測図（1/20）

第87図　志手町遺跡SP150出土遺物実測図（1/3）



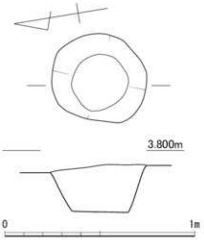
第88図　志手町遺跡SP175実測図（1/20）



第89図　志手町遺跡SP175出土遺物実測図（1/3）

SP175（第88図）

１区のA3グリッドで検出したピットである。平面形状はやや歪な楕円形状を呈し、長辺0.42m、短辺0.33m、深さ0.41mを測る。埋土は黒褐色土で、小礫と炭を少量含み、やや粘性を帯びる。内部構造は南半部を中位程まで掘り下げてそこにテラス状の段を持ち、北半部はさらに一段深く掘り下げる。遺物は土師器と瓦質土器が出土した。中世に属する遺構ではあるが、年代を特定できる資料に乏しく、詳細な時期までは明らかにできない。



第90図　志手町遺跡SP188実測図（1/20）

SP175出土遺物（第89図）

SP175出土遺物を第89図に示した。59は瓦質土器の鍋である。口縁部は短く外に折れ、端部は丸く肥厚する。図示できるのはこの１点だけである。

SP188（第90図）

１区のB3グリッドで検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、長辺0.50m、短辺0.46m、深さ0.24mを測る。埋土は暗褐色土で、小礫及び炭を微量含む。内部の掘り込みは逆台形状を呈し、壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。遺物は土師器が出土した。遺構の年代は14世紀後半～15世紀前半頃に位置づける。

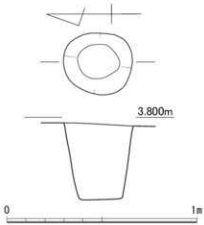
第91図　志手町遺跡SP188出土遺物実測図（1/3）

SP188出土遺物（第91図）

SP188出土遺物を第91図に示した。60は土師器小皿で、口縁部は外に開きながら短く立ち上がり、底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。図示できるのはこの１点だけである。

SP193（第92図）

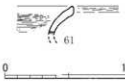
１区のA3グリッドで検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、長辺0.37m、短辺0.33m、深さ0.40mを測る。埋土は黒褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器が出土した。年代を特定できる資料に乏しく、遺構の詳細な時期は明らかにできない。



第92図　志手町遺跡SP193実測図（1/20）

SP193出土遺物（第93図）

SP193出土遺物を第93図に示した。61は土師器の甕、もしくは鍋である。口縁部外端面及び内面にハケ目調整を施す。図示できるのはこの１点だけである。



第93図　志手町遺跡SP193出土遺物実測図（1/3）

SP197（第94図）

１区のA3グリッドで検出したピットである。平面形状は東西方向に細長い楕円形状を呈し、長辺0.50m、短辺0.36m、深さ0.48mを測る。埋土は黒褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。内部は逆台形状を呈するが、壁面は急角度で立ち上がる。東半部の中位から完形の土師器小皿2点が、ピット上から投げ込まれたように口縁部を横に向けた横位の状態で出土している。小皿以外に図示できるものがないため遺構の時期を明確にしがたいが、14世紀代の遺構の可能性が高い。

SP197出土遺物（第95図）

SP197出土遺物を第95図に示した。62・63はともに土師器小皿である。62は底部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。63は口縁部が直線的に立ち上がり、端部は細く尖る。ともに底面には回転糸切り痕が残り、62は板状圧痕も認められる。

SP213（第96図）

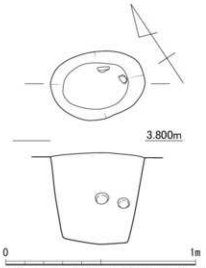
１区のA2・A3グリッドで検出したピットである。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長辺0.45m、短辺0.38m、深さ0.29mを測る。埋土は暗褐色土で、微量の炭と小礫をごくわずかに含み、やや粘性を帯びる。底面は平坦ではあるが、西側がやや高く、東側がそれより深く東西にやや傾斜している。ピットの中央部の上位から、第97図に示す土師器坏が出土した。遺構の年代を特定できる資料に乏しいが、概ね14世紀後半～15世紀前半頃に比定できよう。

SP213出土遺物（第97図）

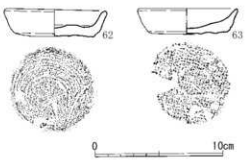
SP213出土遺物を第97図に示した。64は土師器の坏で、口縁部を欠く。底部からの立ち上がりは基部側の器壁が膨らむ。底面には回転糸切り痕が残る。

SP220（第98図）

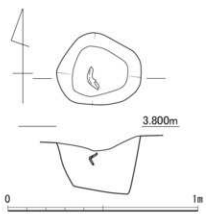
１区のA2グリッドで検出したピットである。SB2の延長線上に位置することから掘立柱建物を構成するピットの可能性も考慮したが、対応する柱穴が明確ではなく、掘立柱建物とは別の遺構と判断した。平面形状は南北に細長い楕円形状を呈し、長辺0.48m、短辺0.29m、深さ0.30mを測る。埋土は暗褐色土で、少量の小礫と微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。ピットの検出面において、２点の土師器坏が正位置で重ねた状態で出土した。このことから、ピット埋没時に何ら



第94図　志手町遺跡SP197実測図（1/20）



第95図　志手町遺跡SP197出土遺物実測図（1/3）



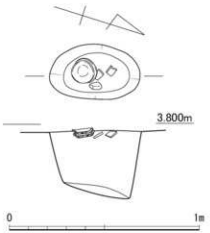
第96図　志手町遺跡SP213実測図（1/20）

第97図　志手町遺跡SP213出土遺物実測図（1/3）

かの祭祀行為が行われていたものと考えられる。また、この他にも内部から数点の土師器坏片が出土した。出土遺物から、SP220の年代は14世紀前半に位置づけられる。

SP220出土遺物（第99図）

SP220出土遺物を第99図に示した。65～67は土師器坏である。65は検出面で2枚重ねの状態で出土したものの内、上に重ねていたものである。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。器高は3cm程度と低い。底面には回転糸切り痕が残る。66は65の下に置かれていたもので、65と同様に口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。器高もほぼ同じで、底面には回転糸切り痕が残る。67は底部の大部分を欠くが、口縁部は直線的に立ち上がり、底面にはわずかに回転糸切り痕が残る。器高は65・66よりわずかに高い。



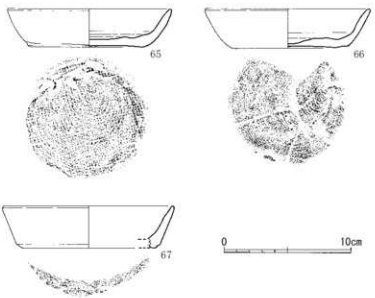
第98図　志手町遺跡SP220実測図（1/20）

SP222（第100図）

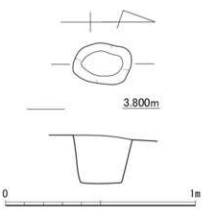
1区のA2・A3グリッドで検出したピットである。平面形状は楕円形状を呈し、長辺0.32m、短辺0.21m、深さ0.26mを測る。埋土は暗褐色土で、微量の炭を含み、やや粘性を帯びる。遺物は土師器、瓦質土器が出土した。出土遺物から、14世紀代の遺構と判断される。

SP222出土遺物（第101図）

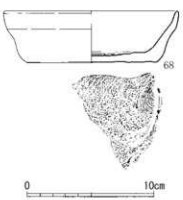
SP222出土遺物を第101図に示した。68は土師器坏で、底部から外に開きながら立ち上がり、口縁部は軽く内湾する。底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。図示できるのはこの1点だけである。



第99図　志手町遺跡SP220出土遺物実測図（1/3）



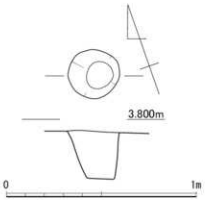
第100図　志手町遺跡SP222実測図（1/20）



第101図　志手町遺跡SP222出土遺物実測図（1/3）

SP241（第102図）

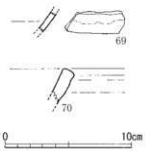
1区のB3グリッドで検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、長辺0.28m、短辺0.26m、深さ0.25mを測る。埋土は暗褐色土で、微量の小礫と炭を含む。遺物は陶器、土師器、瓦質土器が出土した。中世に属する遺構ではあるが、年代を特定できる遺物に乏しく、詳細な時期は明らかにできない。



第102図　志手町遺跡SP241実測図（1/20）

SP241出土遺物（第103図）

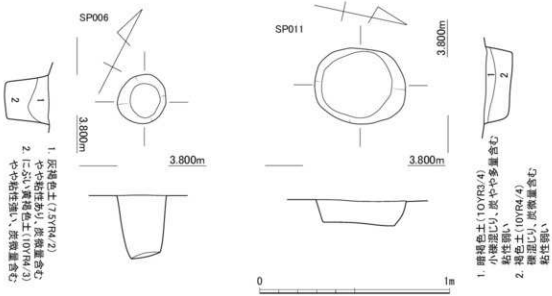
SP241出土遺物を第103図に示した。69は施釉陶器の碗である。全体に二次焼成を受けるが、外面の体部下半は露胎となる。中国産天目碗の可能性が高い。70は瓦質土器の鉢で、口縁部は方形状におさめる。



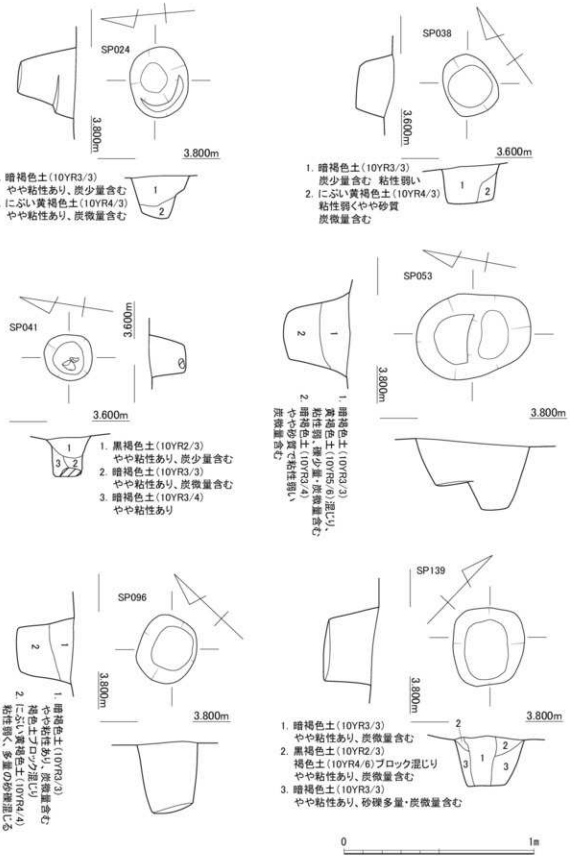
第103図　志手町遺跡SP241出土遺物実測図（1/3）

その他の柱穴状遺構（第104・105図）

上記以外のピットのうち、埋土が複数層に分層できるものを中心に図示した。個々の遺構については詳述しないが、規模や埋土等の特徴、出土遺物等については遺構一覧表を参照されたい。



第104図　志手町遺跡その他柱穴状遺構実測図①（1/20）



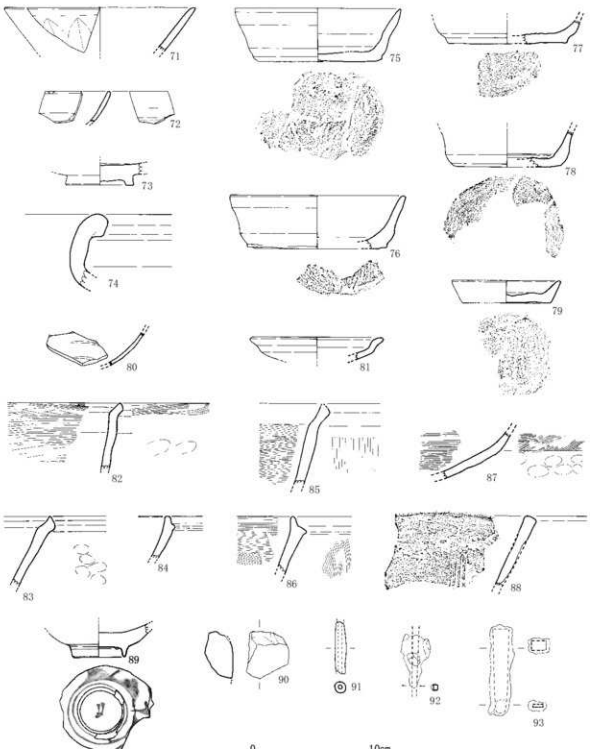
第105図　志手町遺跡その他柱穴状遺構実測図②（1/20）

（9）調査区出土遺物

志手町遺跡の発掘調査出土品のうち、特定の遺構に帰属しない遺物を第106図に示した。これらの遺物は表土の機械掘削時や、人力による遺構検出作業時の出土、あるいは排土から採集したものである。

71～73は青磁碗である。71は外面鎬のある蓮弁文を施す。74は備前焼の甕で、口縁部は折り返して玉縁状に作る。75～78は土師器の坏である。75は体部が外に開き、器壁は口縁部下位が膨らみ端部は細くおさめる。底面には回転糸切り痕が残る。76は底部からの立ち上がりは内湾気味で、端部は丸くおさめる。77・78は口縁部を欠失する。いずれも底面には回転糸切り痕が残り、77は板状圧痕も認められる。79は土師器の小皿である。口縁部は外に直線的に開きながら短く立ち上がる。底面には回転糸切り痕と板状圧痕が残る。80は瓦器椀で、内面に粗いヘラミガキを施す。和泉型瓦器椀の可能性が高い。81は底面に回転糸切り痕が見られない、京都系土師器の皿である。中世の豊後にあっては守護大名大友氏の拠点であった府内や、16世紀中ごろに大友宗麟が府内から拠点を移した臼杵などで多く出土が認められるもので、16世紀中頃に出現し、16世紀後半～末にかけて盛行する。82～84は土師器の鍋である。82・83は口縁部が外反するのに対し、84は直線的に外に開き、端部は断面三角形状に肥厚する。85～87は瓦質土器の鍋で、形状は土師器と同様口縁が外反するもの（85）と、断面三角形状に肥厚するもの（86）がある。87は底部付近の破片で、底面には指頭圧痕が顕著に残る。88は瓦質土器の摺鉢である。89は近世の肥前系染付磁器碗で、外面に呉須による文様を描き、高台内には簡略化した銘款を付す。90は土製の鞴羽口、91は土師質焼成の管状土錘である。92・93は鉄釘で、断面形状は92が方形、93は長方形を呈する。

以上のうち、71・76・77・78・80・81・85～88・92・93は１区の遺構検出時、72・73・75・79・90は２区の遺構検出時、82・83は1区の表土除去時、74・89・91は２区の表土除去時、84は平成29年度の立会調査時に出土した。



第106図　志手町遺跡調査区出土遺物実測図（1/3）

第4章　総　括

第1節　遺跡の年代的位置付け

前章では志手町遺跡の発掘調査で確認された遺構・遺物の概要を報告してきた。本章ではそれを踏まえ遺跡の年代の整理と、遺跡の性格について検討を行う。

志手町遺跡の年代は出土資料から推定するよりほかにない。発掘調査で出土した遺物は14～15世紀代の在地の土師器が大部分を占め、これにわずかながら青磁や白磁、中国産天目碗等の貿易陶磁器や、古瀬戸、備前焼等の国産陶器、瓦器や瓦質土器が含まれる。津久見市内で行政目的の発掘調査が行われたのは志手町遺跡以外には門前遺跡しかなく、当地域の土器を検討するには資料不足の感が否めない。そのため周辺地域の調査成果も参考にしながら、以下に検討を行う。

志手町遺跡出土土器の内、年代の指標となりうるものは土師器坏・小皿である。出土資料は細片が多く、図示しえたものは必ずしも多くはない。小皿は一定量見られるが、形態的変化に乏しく年代の特定は容易ではない。そのため坏を中心に検討を行う。

志手町遺跡出土の代表的な資料を第107図に示す。代表的な遺構として、SB1・SB2・SP220・SK110を取り上げる。2棟の掘立柱建物から出土した土師器坏は、SB1は口径を復元できないが、器高は4.2cmを測る。また、SB2出土の坏は口径12.5cm、器高4.9cmを測り、器高の高さが特徴的である。SP220は検出面で祭祀土器が出土した遺構で、出土した3点の坏の平均で口径12.9cm、底径9.7cm、器高3.5cmである。これらの土器は、口縁部の少し下方で器壁がやや厚みをもつ特徴がある。一方、SK110は3点の坏が出土しており、その平均値は口径12.5cm、底径9.1cm、器高3.5cmを測る。これらの坏の器壁は底部側が厚く、口縁部は細く尖り気味となるもので、先のSB1・2やSP220出土の坏とは微妙に形態が異なる。

次に、津久見市及び周辺地域の様相を確認しておきたい。

大分市の大友氏館を中心に形成された中世都市・府内（遺跡名は中世大友府内町跡）では、14～16世紀のまとまった資料が得られている。ここで組み立てられた編年[1]のうち、14～15世紀の資料を第108図Aに示す。坏には14世紀代には口径に対して底径が小さく、口縁が内湾する椀に近い形態をとるものと、底径が大きく口縁部が直線的かやや内湾気味に立ち上がるものの2種類ある。志手町遺跡では前者は認められず、全て後者である。

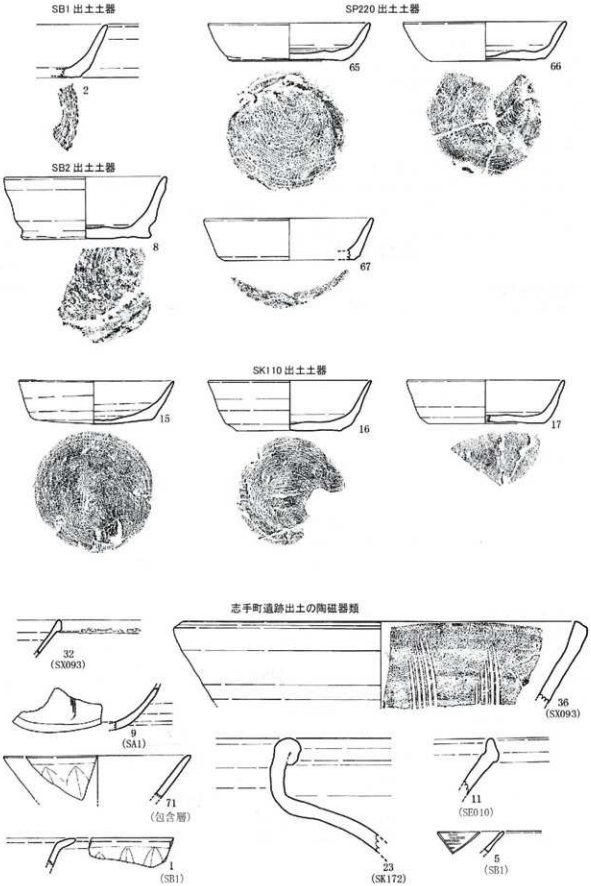
志手町遺跡とは青江川を挟んだ対岸に位置する門前遺跡から出土した土師器坏は、大きく4つに形式分類される（第108図B）[2]。A形式は口縁が内湾気味に立ち上がり、端部は摘み上げるように細く作る特徴を持つ。豊後では国東半島から別府湾沿岸地域で14世紀代から認められる形式である。B形式は皿状を呈し、内外面にロクロ成形による多条の段を持つもので、豊後では15世紀後半から16世紀前半にかけて認められる。C形式はいわゆる「京都系土師器皿」である。16世紀後半以降に盛行する。D形式は1点だけの出土で詳細不明のため、ここでは扱わない。このうち、志手町遺跡で認められるのはA形式とC形式で、B形式は全く認められない。C形式も包含層から1点出土しているだけで、遺構に伴うものはA形式以外にはない。

津久見市の南、佐伯市の栂牟礼遺跡では、3地点の発掘調査で15～16世紀の遺跡が確認されており、その出土資料の分析もなされている。ここでは土師器坏は3形式に分類される（第108図C）[3]。a類は11cm前後の口径に対して底径が小さく、体部が直線的に開くもので、器高が4cm前後と高い。b類は津久見門前遺跡におけるA形式に該当するものである。c類はa類のように口径に対して底径が小さく、体部が直線的に開くもので、器高が2.5～3cm程度と低く皿状を呈する。陶磁器等の共伴資料から、a類は15世紀代、b類は15世紀末～16世紀初め、c類は16世紀前半代に位置付けられている。このうち、志手町遺跡で認められるのはb形式で、a・c形式は全く出土していない。

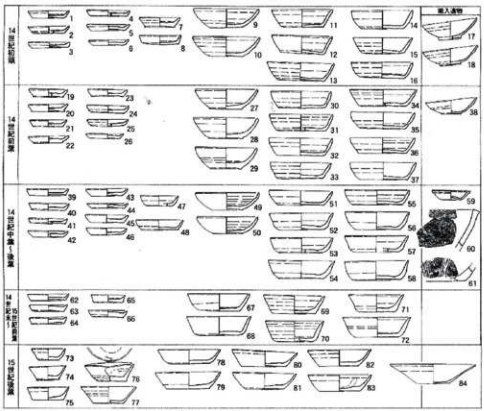
1) 坂本嘉弘2005「中世大友城下町跡出土の土師質土器編年」「豊後府内1」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第1集、大分県教育庁埋蔵文化財センター他。豊後府内の各報告書を参照。

2) 小柳和宏2005『津久見門前遺跡』『津久見門前遺跡・瀬戸遺跡・佐伯門前遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第3集、大分県教育庁埋蔵文化財センター

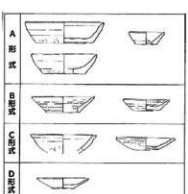
3) 小柳和宏2014「総括」『栂牟礼遺跡天神ノ下地区・栂牟礼遺跡樽木地区・曳地館跡・元越遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第72集、大分県教育庁埋蔵文化財センター



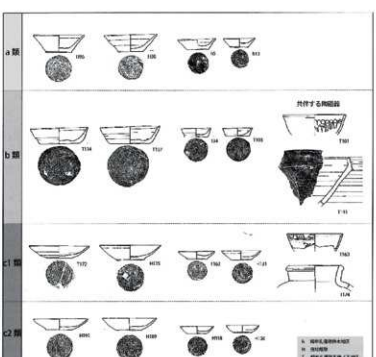
第107図　志手町遺跡出土の主な土器・陶磁器（1/3）



中世大友府内町跡の 14 ～ 15 世紀土器編年図



門前遺跡の土師器分類



佐伯市楠牟礼遺跡の土器分類

第108図　志手町遺跡関連の土器編年・分類図（縮尺不同）

以上の諸例から、志手町遺跡の土師器坏については14世紀～16世紀初めの時間幅の可能性をもつこととなるので、その絞り込みを行う。津久見門前遺跡ではA形式は14世紀後半の特徴を有するものであるが、共伴する陶磁器から導き出される年代が15世紀前半代を示すことから、A形式が15世紀前半まで残存する可能性が指摘されている。そして、さらに南の栂牟礼遺跡では、出土状況からb類の坏（津久見門前遺跡のA形式）がさらに15世紀末～16世紀初頭まで残るとする。

一方、志手町遺跡から出土する土師器坏の特徴を既存の編年と照らし合わせると、掘立柱建物SB1・2やSP220出土のものにみられる、口縁部の下の器壁がやや膨らむ特徴は、中世大友府内町跡の14世紀初頭から前葉にかけて認められる。こうしたことからこれらの土器はまず14世紀前半に置かれる可能性が高い。また、SK110出土の坏は、器壁が底部側は厚く、口縁部は細く仕上げており、やはり中世大友府内町跡の14世紀中葉～後葉の土器に見られる特徴である。こうしたことからこの一群は14世紀後半に置かれる可能性が高い。また、志手町遺跡から出土する陶磁器（第107図下段）では、鎬蓮弁文を持つ青磁碗や鉢、劃花文を施す青磁碗、白磁玉縁碗など、12～13世紀の特徴を持つものはあるが、15世紀や16世紀に比定できるものはない。備前焼摺鉢も中世Ⅲa期（14世紀後半）に比定され、東播系須恵器鉢も14世紀代の特徴を有する。加えて、13世紀代と考えられる和泉型瓦器椀が出土している点など、全体として古い傾向がみられる。これらの資料はいずれも遺構出土の土師器坏と明確な共伴関係にあるわけではないが、遺跡の相対的な年代を押さえる意味では参考になろう。また、土師器坏そのものでも、大分市の中世大友府内町跡で14世紀末～15世紀前半に比定される、口縁端部を削いで先尖りとする特徴的な坏（第108図Aの70・72）は見られない。こうした点を勘案すると、一部13世紀後半にさかのぼるもの（小皿の一部が該当するか？）や15世紀前半まで下るものを含む可能性はあるが、志手町遺跡の中心的な年代は14世紀代に位置付けられる可能性が高い。

以上の結果から、志手町遺跡は遺構としては確認できないが、13世紀後半頃には何らかの形で土地利用が始まり、14世紀前半に２棟の掘立柱建物をもつ遺跡が形成されたものと考えられる。２棟の掘立柱建物は軸線が一致しないので、両者が共存するとみるよりは多少の時期差を持つ可能性が高い。14世紀後半にはSB2の場所に土坑SK248が構築されていることから、少なくともこの時期にはSB2は廃絶しているとみられる。一部の土器から15世紀前半までは遺跡が継続する可能性があるが、15世紀後半には継続しないので、少なくとも遺跡の終期は15世紀前半までで押さえられる。

第２節　遺跡の評価

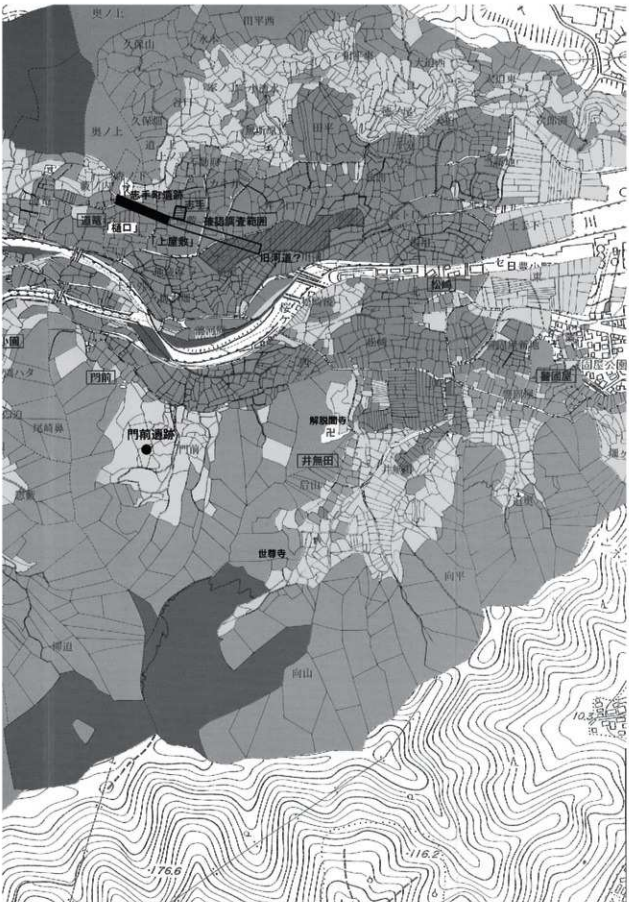
志手町遺跡は前節での検討のとおり、14世紀代を中心とする遺跡であることが分かった。次に遺跡の性格について検討したい。

発掘調査で確認された遺構は、掘立柱建物２棟、柵列１条、井戸１基、土坑墓１基、土坑45基、小規模な溝２条、遺物集中ブロック１箇所、柱穴状遺構180基である。まず、土坑墓についてみてみたい。

土坑墓ST116は側臥屈葬状態の埋葬人骨が出土しており、土葬墓であることが分かる。土坑墓のプランは1m×0.6m程度と小さく、遺体が収まる程度の穴を掘り、木棺等は用いずにそこに遺体を直接土葬したものである。また、明確な副葬品も伴わない。大分県における中世墓の変遷については原田昭一が概略を述べており[6]、それに照らし合わせると、中世前半に盛行する屋敷墓ではないことは明らかである。土坑の規模や副葬品を伴わない薄葬化した墓である点から、15世紀中葉～17世紀前葉の墓制に近い。ただし、この時期に見られる墓の群集化はせず、ST116は単独で存在していることから、15世紀中葉以前に位置づけるのが妥当であろう。そうであれば、志手町遺跡の時期とも概ね合致することになり矛盾はない。集落の中に単独で営まれた墓ということになろうが、被葬者もどのような身分・立場の人であったのかを知る手がかりもなく、これが集落の中でどのような位置づけであったのかは明らかにできない。

次に掘立柱建物である。SB1・SB2ともに２間×２間の総柱の掘立柱建物で、機能としては倉庫と考えられるものである。先にも述べたが、この２棟の建物は軸線を共有しないので、２棟が同時に併存していたとみるより

[6] 原田昭一1999『大分県における中世墓制変遷略史』『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズ⑦、同志社大学考古学シリーズ刊行会



第109図　青江川下流域の地籍図集成（1/8,000）

は多少の時期差があると考えた方がよさそうである。中世前半期における蔵を中心とした遺跡、ということになろう。

そして出土遺物であるが、在地の土師器坏・小皿が大部分を占めるものの、少数ながら青磁や白磁、中国産天目碗といった貿易陶磁器、備前焼や古瀬戸、東播系須恵器、和泉型瓦器椀といった広域流通品が認められる。とくに中国産天目碗は一般的な集落から出土することは余りなく、稀少な資料といえる。青江川を挟んだ対岸の門前遺跡では中国産天目碗が5点出土しており、関連が注意される。このような遺物の状況を踏まえると、青江川の河口近くに展開し、その水運を利用した物資集散地のような性格の遺跡であった可能性が高い。

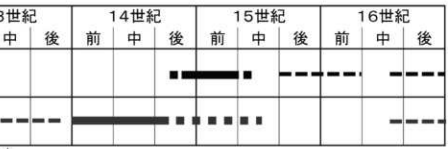
次に志手町遺跡をより広域的に見てみる。青江川下流域の中世の状況については、門前遺跡の報告書において明治21年調製の地籍図を基にした小柳和宏の詳細な分析[5]がある。これを基に発掘調査成果を踏まえて再度検討を行う。

第109図は青江川下流域の地形図に地籍図を合わせたものである。これに志手町遺跡の発掘調査地点を落とすと、志手町遺跡は近世の道場村の字「樋口」から、志手村の字「上屋敷」にかけて所在することが分かる。遺跡地一帯は明治21年の時点では田地として利用されているが、明治年間調製の地籍図は近世の土地利用を反映しているとされるので、その利用は近世までさかのぼるとみてよい。実際に発掘調査でも盛土の下に水田層を確認している。津久見門前遺跡の報告書でも指摘されているとおり、字「上屋敷」の中央に一辺約40m四方の方形区画の地割が認められる。青江川下流域を拠点とした津久見氏や薬師寺氏といった大友氏被官層や在地領主層（上級武士）の屋敷地の可能性が指摘されている。その位置は志手町遺跡の北東部に隣接する位置にあるが、発掘調査ではこの「屋敷地」に関する遺構は確認できず、この方形区画の南側以東では確認調査でも遺構は確認できなかった。しかし、その至近地において稀少な陶磁器等を含む物資集散地と思われる遺跡を確認できたことは大きな意味を持つ。こうした遺跡の形成には当然有力者の存在が不可欠であり、大友氏の水軍衆として活躍した「津久見衆」の存在が真っ先に考えられよう。おそらく遺跡の至近地に屋敷を構え、「港湾」的性格をもつ遺跡の管理掌握を行っていたものと考えられる。この方形区画が屋敷であったかどうかは発掘調査を実施しないと明らかにできないが、その可能性は高まったとみてよいのではないだろうか。

この「上屋敷」の南側には字「地蔵本」、その東側には字「染屋」、字「川田」、字「横枕」といった地名が認められる。小柳は「上屋敷」と「地蔵本」や「染屋」の間は一段低く、段丘崖又は旧河道がその境となっていた可能性を指摘する。改めて地籍図をみると、字「染屋」から字「川田」、字「横枕」にかけて、旧河道と思われる地割が認められる（第109図アミ掛け部）。実際に平成30年3月に実施した確認調査でも一部で湧水の著しい湿地堆積層を確認しており、それがこの旧河道に該当する。この旧河道の形成や埋没時期は明らかではないが、14世紀段階の流路がこれであれば、青江川は今よりも遺跡近くまで寄っていたことになる。遺跡の占地にはこうした地理的要因も関係していたはずである。志手町遺跡が遅くても15世紀前半で終焉を迎えるので、「上屋敷」一帯が水田化するのは中世後半以降であることは間違いないが、それ以上は判断する術がない。周辺での発掘調査の積み重ねによって、明らかにされることを期待したい。

さて、青江川を挟んだ対岸には中世寺院跡である門前遺跡が位置することは再三触れてきた。最後に志手町遺跡と門前遺跡の関係について整理しておきたい。第110図は志手町遺跡と門前遺跡の時間的関係を整理したものである。門前遺跡の発掘調査では、14世紀末から15世紀初頭に創建された瓦葺建物が、15世紀前半には早くも廃絶した状況が確認されている。その後、15世紀後半から16世紀前半にかけてと、16世紀中頃から後半にかけて小規模ながら遺跡の形成が認められている。志手町遺跡では15世紀後半以降の資料は1点の京都系土師器を除いて認められないので、15世紀前半に廃絶した寺院との関係が留意されるところである。志手町遺跡の形成が14世紀を中心とすることから、14世紀末時点では遺跡としては終末的な状況であったと考えられ、両者は厳密には直接的な関係性に乏しいのかもしれない。しかし、巨視的にみると13世紀後半頃から青江川下流の北岸域で、有力者層による交易を含めた活動が行われており、それがその後の展開の経済的バックボーンとなった可能性は否定できない。すなわち、志手町遺跡の対岸、井無田にある世尊寺の石造五重塔は、紀年銘はないものの14世紀後半の造顕とされるし、門前遺跡の形成が始まるのも14世紀末である。つまり、志手町遺跡のピークが過ぎた14世紀後半頃から、青江川下流域の南岸部で遺跡形成が始まる状況が認められる。大型の石造物にしても寺院の建立にし

[5] 小柳前掲註2)



※太線は遺跡の主たる時期を示す。
※破線は断片的であるが遺跡形成あるいは資料が認められる時期を示す。

第110図　志手町遺跡と門前遺跡の時期別対応

ても、そこには経済力を持った有力者があって成しえるものである。そう考えると、14世紀後半が一つの画期となって、それまで青江川下流域の北岸にあった経済活動の拠点が、南岸域に移ったとみることができるだろう。志手町遺跡から出土する陶磁器のほとんどが14世紀前半頃までのものであることもその傍証となろう。このようにみると、志手町遺跡も門前遺跡も、青江川下流域における中世史を語るうえで欠かせない重要な遺跡であると評価できる。当時の資料が断片的にしか残されていない以上、その歴史解明に埋蔵文化財発掘調査が果たす役割は極めて大きく、今後この発掘調査成果を踏まえて新たな調査研究が進展することを期待したい。

第３節　総括

最後に、志手町遺跡の発掘調査で分かったことやその意義を以下に列記し、まとめとしたい。

①志手町遺跡は青江川の河口を約１km遡った沖積平野上に位置する遺跡で、遺跡の至近には青江川の旧河道が認められる。

②発掘調査では倉庫である2棟の掘立柱建物跡が確認され、それは14世紀前半頃に機能していた。

③出土遺物は在地の土師器坏・小皿を主体とするが、わずかながら青磁や白磁・中国産天目碗といった貿易陶磁器や、備前焼や古瀬戸、東播系須恵器、和泉型瓦器椀等の広域流通品が含まれる。とくに中国産天目碗は一般的な集落からは出土しないので、青江川ないしはその旧河道に面した、物資集散地的な性格を持つ遺跡であったと推定される。

④青江川下流域は津久見氏や薬師寺氏など「津久見衆」と呼ばれる大友氏被官層の本貫地と考えられ、志手町遺跡もこの津久見衆が掌握管理していた可能性が高い。

⑤志手町遺跡の周囲には「上屋敷」と呼ばれる小字があり、そこには一辺40m四方の方形区画の地割が認められる。そこが14世紀前半における有力者層の屋敷地であった可能性が高い。

⑥志手町遺跡は14世紀後半頃から終息に向かうが、青江川の南岸域ではこの頃から世尊寺石造五重塔の造立や瓦葺建物を持つ寺院である門前遺跡の形成が始まるなど、川の南北で対照的な動きが展開する。おそらく14世紀後半に、経済活動の拠点が北岸から南岸の井無田周辺に移ったと考えられる。

⑦志手町遺跡は15世紀前半には廃絶し、その後は遺跡が形成されることなく一帯は水田化した。

⑧中世以前においても、少量ながら縄文土器や弥生土器が出土しており、当該期の遺跡が周囲に存在する可能性がある。特に縄文土器は晩期終末に比定される無刻目凸帯文土器であるが、これまで津久見市で出土した考古資料としては最古のものである。

⑨志手町遺跡の発掘調査は、行政目的で行われた発掘調査としては門前遺跡に次いで２例目である。中世の資料が断片的にしか残されておらず、また埋蔵文化財の状況も不明な点が多い中で、この発掘調査成果がもたらす成果は大きいといえ、今後の調査研究により地域の歴史の解明に繋がることが期待される。

遺　構　一　覧　表

志手町遺跡遺構一覧表①

遺構番号	遺構種別	調査区域	グリッド	検出標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SP001	ピット	2区	B5	3.500	0.24	0.22	0.07	黒褐色土					立会調査で確認
SP002	ピット	2区	B5	3.499	0.43	(0.33)	0.08	黒褐色土				礎盤石	立会調査で確認 礎盤石
SP003	ピット	2区	B5	3.579	0.41	(0.25)	0.18	黒褐色土				土師器	立会調査で確認
SP004	ピット	2区	D8	3.668	0.32	0.28	0.28	灰黄褐色土	10YR4/2	○	大振りの角礫、炭微少量		
SP005	ピット	2区	D8	3.654	0.24	0.22	0.21	暗褐色土	10YR3/3	○	炭少量		
SP006	ピット	2区	D8	3.644	0.26	0.26	0.33	個別図参照					
SD007	溝	2区	C8・D8	3.672	(2.25)	0.33	0.15	灰黄褐色土	10YR4/2	△	炭少量、粗粒砂		
SP008	ピット	2区	C8	3.653	0.32	0.25	0.17	灰褐色土	7.5YR4/2		炭やや多い		
SP009	ピット	2区	C7	3.619	0.39	0.27	0.10	暗褐色土	10YR3/4	△	小礫少量、炭微量		
SE010	井戸	2区	C7	3.710	2.47	1.76	0.96	暗褐色土	10YR3/4	◎	炭微量	土師器、東播系須恵器、石臼、木製品	
SP011	ピット	2区	D7	3.622	0.48	0.40	0.14	個別図参照					
SD012	溝	2区	C7・D7	3.635	0.91	0.20	0.21	暗褐色土	10YR3/3	○	炭少量		
SP013	ピット	2区	D7	3.632	0.26	0.24	0.15	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭少量	土師器	
SP014	ピット	2区	D7	3.638	0.20	0.19	0.22	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量		
SP015	ピット	2区	C7	3.618	0.25	0.20	0.14	暗褐色土	10YR3/4	○	小礫、炭微量		
SP016	ピット	2区	C7	3.695	0.34	0.28	0.12	褐色土	7.5YR4/4	○	炭微量		
SP017	ピット	2区	C7	3.657	0.38	0.28	0.07	灰黄褐色土	10YR4/2	△	小礫、炭微量	土師器	
SP018	ピット	2区	C7	3.584	0.52	0.46	0.21	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫多量、炭微量	土師器	
SP019	ピット	2区	C7	3.699	0.34	0.29	0.24	暗褐色土	10YR3/4	○	小礫少量、炭微量		
SP020	ピット	2区	C6	3.666	0.29	0.26	0.37	暗褐色土	10YR3/3	○	礫少量、炭微量	土師器	
SP021	ピット	2区	C6	3.719	0.34	(0.24)	0.48	暗褐色土	10YR3/3	○	礫、炭微量		
SP022	ピット	2区	C6	3.699	0.50	0.33	0.15	にぶい黄褐色土	10YR4/3	△	小礫、炭微量		
SP023	ピット	2区	C6	3.683	0.30	0.26	0.28	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP024	ピット	2区	C6	3.719	0.38	0.31	0.31	個別図参照					
SK025	土坑	2区	C6	3.696	0.60	0.52	0.19	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP026	ピット	2区	C6	3.648	0.28	0.22	0.33	暗褐色土	10YR3/4	○	小礫、炭微量		
SP027	ピット	2区	C6	3.625	0.39	0.38	0.33	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量		
SP028	ピット	2区	C7	3.604	0.30	0.25	0.14	暗褐色土	10YR3/4	△	礫、炭微量		
SP029	ピット	2区	C6	3.593	0.27	0.19	0.11	にぶい黄褐色土	10YR5/4	△	小礫、炭微量		
SK030	土坑	2区	C6	3.592	0.58	0.40	0.17	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭少量		
SP031	ピット	2区	C6	3.621	0.26	0.21	0.42	暗褐色土	10YR3/3	○	炭微量		
SP032	ピット	2区	C6	3.642	0.50	0.37	0.11	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量		
SP033	ピット	2区	C6	3.661	0.30	0.28	0.47	暗褐色土	10YR3/3	○	炭微量	土師器	
SP034	ピット	2区	C6	3.644	0.34	0.32	0.13	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量		
SK035	土坑	2区	C6	3.633	0.70	0.32	0.20	暗褐色土	10YR3/4	○	小礫少量、炭少量	土師器	
SK036	土坑	2区	C6	3.617	0.80	0.62	0.30	個別図参照				土師器	壁面に焼土3箇所
SP037	ピット	2区	B6	3.557	0.32	0.23	0.16	暗褐色土	10YR3/4	△	炭微量		
SP038	ピット	2区	B6	3.577	0.33	0.27	0.21	個別図参照					
SK039	土坑	2区	B6	3.536	0.58	0.47	0.27	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭少量	土師器	
SP040	ピット	2区	B6	3.507	0.35	0.34	0.21	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量		
SP041	ピット	2区	B6	3.530	0.26	0.24	0.21	個別図参照				土師器	
SP042	ピット	2区	B6	3.536	0.38	0.31	0.19	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭少量	土師器、瓦質土器	
SP043	ピット	2区	B6	3.502	0.36	0.24	0.26	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量		
SP044	ピット	2区	B6	3.494	0.36	0.35	0.49	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭少量	土師器	
SP045	ピット	2区	B6	3.497	0.22	(0.18)	0.30	暗褐色土	10YR3/4	△	小礫少量	土師器	
SP046	ピット	2区	B6	3.507	0.45	0.36	0.33	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭少量	土師器、陶器	
SP047	ピット	2区	C6	3.624	0.34	0.21	0.25	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量		
SP048	ピット	2区	C6	3.585	0.36	0.32	0.36	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭少量		
SP049	ピット	2区	B6・C6	3.572	0.39	0.35	0.24	暗褐色土	10YR3/4	△	小礫少量、炭微量		
SP050	ピット	2区	B6	3.525	0.18	0.14	0.26	暗褐色土	10YR3/4	△	炭微量		
SP051	ピット	2区	C6	3.628	0.49	0.40	0.18	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量		
SP052	ピット	2区	C6	3.617	0.26	0.24	0.36	暗褐色土	10YR3/3		小礫、炭微量		
SP053	ピット	2区	C6	3.690	0.61	0.45	0.37	個別図参照				土師器	
SP054	ピット	2区	C6	3.701	0.36	0.32	0.06	暗褐色土	10YR3/4	△	粗粒砂多量、炭微量	砥石	砥石出土
SP055	ピット	2区	C6	3.684	0.38	0.24	0.22	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量		
SP056	ピット	2区	C5	3.646	0.44	0.26	0.07	暗褐色土	10YR3/3	△	炭微量		
SP057	ピット	2区	C5	3.666	0.34	0.25	0.13	暗褐色土	10YR3/3	△	砂粒(やや砂質)、炭微量		
SP058	ピット	2区	C5	3.641	0.35	0.33	0.16	暗褐色土	10YR3/3	△	礫、炭微量	土師器、鉄釘	
SP059	ピット	2区	C5	3.655	0.38	0.33	0.28	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP060	ピット	2区	C5	3.631	0.28	0.28	0.26	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP061	柵列	2区	C6	3.661	0.52	0.42	0.21	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭少量	土師器	
SP062	ピット	2区	C6	3.635	0.34	0.29	0.31	個別図参照				土師器	
SP063	ピット	2区	C6	3.612	0.28	0.26	0.45	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量		
SP064	ピット	2区	C6	3.579	0.44	0.25	0.25	暗褐色土	10YR3/3	△	炭微量	瓦質土器	

志手町遺跡遺構一覧表②

遺構番号	遺構種別	調査区域	グリッド	検出標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SP065	ピット	2区	C6	3.634	0.34	0.30	0.24	暗褐色土	10YR3/3	△	褐色土(10YR4/6)粒、炭微量	土師器	
SP066	ピット	2区	C6	3.590	0.29	0.26	0.21	暗褐色土	10YR3/3	△	炭微量		
SK067	土坑	2区		3.567	0.54	0.51	0.17	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP068	ピット	2区	B6	3.499	0.25	0.24	0.12	暗褐色土	10YR3/4	△	小礫少量、炭微量		
SP069	ピット	2区	C5	3.665	0.46	0.39	0.51	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫多量、炭少量	土師器	
SK070	土坑	2区	C5	3.671	0.56	0.47	0.27	黒褐色土	10YR2/3	○	礫多量、炭微量	土師器、須恵質土器、鉄製品	
SP071	柵列	2区	C5	3.656	0.43	0.38	0.52	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭少量、下半はやや砂質	土師器、鉄製品	
SP072	ピット	2区	C5	3.651	0.44	0.42	0.15	黒褐色土	10YR2/3	△	礫多量、炭微量		
SP073	ピット	2区	B5・C5	3.629	0.43	0.25	0.13	黒褐色土	10YR2/3	○	礫、炭微量		
SP074	ピット	2区	C5	3.706	0.30	0.25	0.26	暗褐色土	10YR3/3	△	礫、炭微量	土師器	
SP075	ピット	2区	C5	3.721	0.32	0.24	0.17	暗褐色土	10YR3/3	△	礫、炭微量	土師器	
SP076	ピット	2区	C5	3.640	0.39	0.35	0.22	暗褐色土	10YR3/3	△	炭微量		
SP077	柵列	2区	C5	3.676	0.53	0.31	0.31	暗褐色土	10YR3/3	△	礫多量、炭微量	青磁、土師器	
SP078	ピット	2区	B5	3.677	0.45	0.31	0.51	黒褐色土	10YR2/3	△	礫多量、炭微量	青磁、土師器	
SP079	ピット	2区	B5	3.654	0.47	0.43	0.29	黒褐色土	10YR2/3	△	礫多量、炭微量		
SP080	ピット	2区	B5	3.639	0.26	0.23	0.24	暗褐色土	10YR3/3	△	礫、炭微量		
SK081	土坑	2区	B5	3.668	0.54	0.40	0.26	暗褐色土	10YR3/3	△	礫多量、炭微量	土師器	
SP082	ピット	2区	B5	3.616	0.25	0.23	0.15	暗褐色土	10YR3/3	△	礫、炭微量		
SP083	ピット	2区	B5	3.652	0.43	0.34	0.55	黒褐色土	10YR2/3	△	礫、炭微量	土師器	
SP084	ピット	2区	B5	3.606	0.38	0.37	0.24	黒褐色土	10YR2/3	○	礫、炭微量		
SP085	ピット	2区	B5	3.681	0.39	0.32	0.29	黒褐色土	10YR2/3	△	礫、炭微量	土師器	
SP086	ピット	2区	B5	3.488	0.31	0.28	0.17	暗褐色土	10YR3/3	○	礫、炭微量	土師器	
SP087	ピット	2区	B5	3.483	0.28	0.25	0.17	暗褐色土	10YR3/3	△	炭微量		
SP088	ピット	2区	B5	3.504	0.29	0.23	0.19	黒褐色土	10YR2/3	○	礫少量、炭微量	土師器	
SK089	土坑	2区	B5・C5	3.699	0.57	0.43	0.19	黒褐色土	10YR2/3	○	礫、炭微量	土師器	
SP090	ピット	2区	C5	3.716	0.50	0.43	0.16	黒褐色土	10YR2/3	△	礫、炭微量		
SP091	柵列	2区	C5	3.627	0.51	0.34	0.29	暗褐色土	10YR3/3	△	礫、炭微量		
SP092	ピット	2区	C5	3.664	0.45	0.45	0.19	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭少量	土師器	
SX093	遺物集中	2区	B6	3.651	1.87	0.91	–	–	–	–	–	白磁、中国産天目、古瀬戸、備前、土師器、瓦質土器	
SP094	ピット	2区	C5	3.604	0.30	0.22	0.15	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SK095	土坑	1区	C5	3.695	0.70	0.48	0.31	個別図参照					
SP096	ピット	1区	C5	3.694	0.36	0.30	3.38	個別図参照				土師器	
SP097	ピット	1区	C5	3.633	0.29	0.28	0.24	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫多量、炭微量		
SP098	ピット	1区	C5	3.639	0.52	0.36	0.34	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭少量	土師器	
SP099	ピット	1区	C4・C5	3.606	0.33	0.24	0.28	暗褐色土	10YR3/4	○	小礫少量、炭微量		
SK100	土坑	1区	C4	3.650	0.90	0.66	0.45	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭少量	土師器、瓦質土器	
SK101	土坑	1区	C4	3.635	0.70	0.29	0.31	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP102	ピット	1区	C5	3.599	0.26	0.22	0.13	暗褐色土	10YR3/3	△	礫・砂混じり、炭少量	陸土塊（駄土？）	
SK103	土坑	1区	B5	3.663	0.61	0.37	0.31	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫・砂混じり、炭微量	土師器	
SP104	ピット	1区	B5	3.628	0.33	0.24	0.20	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫多量、砂混じり、炭微量	土師器	
SP105	ピット	1区	B4	3.597	0.53	0.40	0.34	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫、炭微量	青磁、土師器	
SP106	ピット	1区	B5	3.667	0.30	0.28	0.19	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP107	ピット	1区	B5	3.575	0.33	0.28	0.31	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫・砂混じり、炭微量	土師器	
SK108	土坑	1区	B4	3.555	0.80	0.59	0.27	黒褐色土	10YR2/2	○	小礫多量、炭微量	土師器	
SP109	ピット	1区	B5	3.641	0.33	0.28	0.19	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫・砂混じり、炭微量	土師器、鉄釘	
SK110	土坑	1区	B5	3.571	1.21	0.73	0.24	黒褐色土	10YR3/2	△	砂質土、小礫、炭微量	土師器	
SP111	ピット	1区	B5	3.504	0.34	0.28	0.12	暗褐色土	10YR3/3	△	礫、炭微量	土師器	
SP112	ピット	1区	B5	3.551	0.44	0.30	0.28	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫・砂混じり、炭微量	土師器	
SK113	土坑	1区	B5	3.573	0.95	0.59	0.27	暗褐色土	10YR3/3	△	砂・小礫混じり、炭微量	土師器、縄文土器	
SP114	ピット	1区	B4	3.539	0.47	0.42	0.47	黒褐色土	10YR3/2	○	小礫少量、炭少量、焼土微量	土師器、鉄滓	
SK115	土坑	1区	B4	3.582	0.58	0.42	0.36	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫多量、炭微量	土師器	
ST116	土坑墓	1区	B4	3.610	(0.91)	0.48	0.22	黒褐色土	10YR2/3	○	砂混じり、小礫少量、炭微量	土師器、人骨	
SP117	ピット	1区	B4	3.598	0.36	0.25	0.36	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量	土師器、瓦質土器	
SP118	ピット	1区	B4	3.595	0.33	0.27	0.27	黒褐色土	10YR3/2	○	小礫、炭微量	土師器	
SP119	ピット	1区	B4	3.571	0.42	0.28	0.22	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫・砂混じり、炭微量		
SP120	ピット	1区	B4	3.418	0.44	0.33	0.25	黒褐色土	2.5Y3/2	○	小礫・砂混じり、炭微量	土師器	
SP121	ピット	1区	B4	3.592	0.27	0.24	0.42	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP122	ピット	1区	B4	3.553	0.42	0.37	0.24	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP123	ピット	1区	B4	3.513	0.31	0.26	0.25	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	

志手町遺跡遺構一覧表③

遺構番号	遺構種別	調査区域	グリッド	検出標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SP124	欠番												
SP125	ピット	1区	B5	3.485	0.43	0.30	0.21	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量	土師器	焼土含む
SK126	土坑	1区	B4	3.498	0.67	0.33	0.36	灰黄褐色土	10YR4/2	○	小礫・砂混じり、炭微量	土師器	
SP127	ピット	1区	A4	3.531	0.23	0.22	0.32	にぶい黄褐色土	10YR4/3	○	小礫、炭微量		
SP128	ピット	1区	A4・B4	3.515	0.42	0.37	0.27	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP129	ピット	1区	B4	3.547	0.45	0.28	0.20	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫多量、炭微量	土師器	
SP130	ピット	1区	B4	3.599	0.43	0.29	0.37	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器、須恵質土器、弥生土器、焼土塊	
SP131	ピット	1区	B5	3.639	0.25	0.22	0.19	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量		
SP132	ピット	1区	B5	3.658	0.30	0.29	0.22	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫・砂混じり、炭微量	土師器	
SP133	ピット	1区	B5	3.543	0.43	0.38	0.36	暗褐色土	7.5YR3/3	○	小礫、炭少量	土師器、瓦質土器	
SP134	ピット	1区	B5	3.626	0.29	0.28	0.20	暗褐色土	10YR3/3	△	礫・砂混じり、炭微量		
SP135	ピット	1区	B5	3.597	0.30	0.25	0.26	暗褐色土	10YR3/4	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP136	ピット	1区	B4	3.597	0.51	0.43	0.20	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫多量、砂混じり、炭微量	土師器	
SP137	ピット	1区	B4	3.698	0.47	0.35	0.41	黒褐色土	10YR3/2	△	小礫、炭微量	土師器	
SP138	ピット	1区	C4	3.662	0.60	0.52	0.35	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫多量、炭微量		
SP139	ピット	1区	B4	3.627	0.40	0.37	0.29	個別図参照				土師器、瓦質土器	
SP140	ピット	1区	C4	3.663	0.26	0.25	0.20	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫・砂混じり、炭微量	土師器、炭	
SK141	土坑	1区	B4	3.763	0.60	0.45	0.26	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫少量、炭微量	土師器、弥生土器	
SP142	ピット	1区	B4	3.750	0.46	0.31	0.27	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP143	ピット	1区	B4	3.738	0.40	0.26	0.22	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP144	ピット	1区	B4	3.736	0.29	0.24	0.17	暗褐色土	10YR3/4	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP145	ピット	1区	B4	3.752	0.30	0.28	0.26	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫多量、炭微量		
SP146	ピット	1区	C4	3.738	0.44	0.39	0.22	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫多量、炭微量	土師器	
SK147	土坑	1区	B3	3.749	0.77	0.49	0.51	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫多量、炭微量	土師器、瓦質土器	
SK148	土坑	1区	B3	3.748	0.71	0.40	0.49	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP149	ピット	1区	B3	3.762	0.40	0.30	0.17	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP150	ピット	1区	B3	3.724	0.38	0.30	0.24	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	陶器(天目?)、土師器、瓦質土器	
SK151	土坑	1区	B3・B4	3.767	0.75	0.46	0.45	黒褐色土	10YR3/2	△	小礫多量、炭微量	土師器	
SP152	掘立柱建物	1区	B4	3.742	0.62	0.62	0.18	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP153	掘立柱建物	1区	B4	3.737	0.54	0.50	0.39	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫・炭少量	陶器、土師器	
SP154	掘立柱建物	1区	B4	3.708	0.44	0.37	0.12	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器、土錘、骨	
SP155	掘立柱建物	1区	B3・B4	3.768	0.41	0.38	0.27	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP156	掘立柱建物	1区	B3・B4	3.745	0.38	0.36	0.26	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫・炭少量	土師器	
SP157	掘立柱建物	1区	B3・B4	3.740	0.49	0.32	0.26	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器、瓦器	
SP158	掘立柱建物	1区	B3	3.762	0.55	0.43	0.48	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP159	掘立柱建物	1区	B3	3.754	0.56	0.51	0.40	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量	土師器、瓦質土器	
SP160	掘立柱建物	1区	B3	3.740	0.54	0.54	0.48	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭少量	青磁、土師器	
SP161	ピット	1区	B4	3.697	0.40	0.32	0.27	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫多量、炭微量		人為的遺構ではない
SP162	ピット	1区	B5	3.583	0.48	0.35	0.20	黒褐色土	10YR2/3	△	礫、炭微量	土師器	
SP163	ピット	1区	C5	3.686	0.42	0.36	0.34	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP164	ピット	1区	C5	3.650	0.46	0.37	0.28	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫少量、炭微量	土師器、瓦質土器	
SK165	土坑	1区	B4	3.649	0.68	0.36	0.48	黒褐色土	10YR2/3	○	褐色土(7.5YR4/6)ブロック、小礫少量、炭微量	土師器	
SP166	ピット	1区	B5	3.648	0.34	0.28	0.30	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP167	ピット	1区	B5	3.602	0.38	0.27	0.26	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP168	ピット	1区	B5	3.562	0.25	0.22	0.29	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP169	ピット	1区	C4	3.674	0.53	0.35	0.32	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SP170	ピット	1区	B4	3.776	0.30	0.26	0.26	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SK171	土坑	1区	B3	3.762	0.61	0.56	0.43	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量	土師器、瓦質土器	
SK172	土坑	1区	A3・A4	3.708	1.31	0.89	0.38	個別図参照				備前、東播系須恵器、土師器、瓦質土器	
SP173	ピット	1区	A3	3.675	0.31	0.24	0.26	暗褐色土	10YR3/4	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP174	ピット	1区	A3	3.664	0.41	0.41	0.41	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP175	ピット	1区	A3	3.680	0.42	0.33	0.41	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭少量	土師器、瓦質土器	
SK176	土坑	1区	A3	3.709	0.64	0.38	0.34	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫、炭少量	土師器、瓦質土器	
SK177	土坑	1区	B4	3.560	0.62	0.36	0.34	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭少量	土師器	
SK178	土坑	1区	A4	3.586	0.66	0.41	0.38	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP179	ピット	1区	A4	3.565	0.46	0.38	0.30	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量		
SP180	ピット	1区	A4	3.534	0.35	0.23	0.19	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器、焼土塊	
SP181	ピット	1区	A4	3.510	0.37	0.27	0.20	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP182	ピット	1区	B4	3.724	0.39	0.30	0.26	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫、炭微量	土師器	

志手町遺跡遺構一覧表④

遺構番号	遺構種別	調査区域	グリッド	検出標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SP183	ピット	1区	B3	3.724	0.43	0.32	0.35	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP184	ピット	1区	B3	3.702	0.38	0.32	0.33	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP185	ピット	1区	B3	3.716	0.35	0.31	0.35	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SK186	土坑	1区	B3	3.729	0.62	0.46	0.26	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP187	ピット	1区	B3	3.695	0.52	0.45	0.51	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP188	ピット	1区	B3	3.719	0.50	0.46	0.24	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SK189	土坑	1区	B3	3.733	0.57	0.40	0.35	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量	土師器	
SK190	土坑	1区	B3	3.721	0.65	0.52	0.56	黒褐色土	10YR3/2	○	小礫少量、炭微量	土師器、石灰岩魂	石灰岩の巨石
SK191	土坑	1区	A3	3.694	0.98	0.81	0.33	暗褐色土	10YR3/3	○	褐鉄、土師器、瓦質土器、ブロック少量、小礫・炭少量		
SP192	ピット	1区	A3	3.708	0.64	(0.20)	0.20					土師器	
SP193	ピット	1区	A3	3.773	0.37	0.33	0.40	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SK194	土坑	1区	A3	3.765	0.71	0.58	0.66	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器、瓦質土器	
SP195	ピット	1区	A3	3.669	0.32	0.28	0.37	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭少量	青磁、土師器、瓦質土器	
SK196	土坑	1区	A3	3.755	1.37	0.82	0.50	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP197	ピット	1区	A3	3.735	0.50	0.36	0.48	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP198	ピット	1区	A3	3.731	0.42	0.33	0.43	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP199	ピット	1区	A3	3.747	0.33	0.33	0.37	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭微量		
SP200	ピット	1区	A3	3.746	0.47	0.38	0.30	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SK201	土坑	1区	A3	3.749	0.73	0.45	0.25					土師器	
SK202	土坑	1区	A3	3.777	0.86	0.41	0.26	灰黄褐色土	10YR4/2	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP203	ピット	1区	A3	3.701	0.26	0.25	0.25	暗褐色土	10YR3/4	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP204	掘立柱建物	1区	A3	3.784	0.35	0.35	0.30	黒褐色土	10YR2/3	△	小礫・炭微量	土師器	
SP205	掘立柱建物	1区	A3	3.712	0.34	0.31	0.21	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP206	掘立柱建物	1区	B3	3.654	0.34	0.30	0.22	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP207	掘立柱建物	1区	A2	3.789	0.83	0.47	0.27	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	陶器、土師器	
SP208	掘立柱建物	1区	A2	3.780	0.49	0.35	0.23	個別図参照				土師器	
SP209	掘立柱建物	1区	B2	3.735	0.25	0.23	0.38	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫・炭微量	土師器	
SP210	掘立柱建物	1区	A2	3.790	0.38	0.35	0.30	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫・炭微量		
SP211	掘立柱建物	1区	A2・B2	3.785	0.37	0.30	0.27	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫・炭微量	土師器	
SP212	掘立柱建物	1区	B2	3.754	0.48	0.32	0.23	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量		
SP213	ピット	1区	A2・A3	3.752	0.45	0.38	0.29	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫ごくわずか、炭微量	土師器	
SK214	土坑	1区	A2	3.778	0.65	0.56	0.33	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SK215	土坑	1区	A2・A3	3.754	(1.26)	0.62	0.51	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭少量	東播系須恵器、土師器、鉄魂	
SP216	ピット	1区	A2	3.685	0.44	0.30	0.29	暗褐色土	10YR3/3	○	炭微量	土師器	
SP217	ピット	1区	A2	3.730	0.33	0.25	0.20	暗褐色土	10YR3/3	○	炭微量	土師器	
SP218	ピット	1区	A2	3.653	0.41	0.29	0.15	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	東播系須恵器、土師器	
SP219	ピット	1区	A2	3.687	0.41	0.38	0.32	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP220	ピット	1区	A2	3.777	0.48	0.29	0.30	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	土器祭祀
SP221	ピット	1区	A2	3.702	0.42	0.33	0.37	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫ごくわずか、炭微量	土師器	
SP222	ピット	1区	A2・A3	3.663	0.32	0.21	0.26	暗褐色土	10YR3/3	○	炭微量	土師器、瓦質土器	
SP223	ピット	1区	A3	3.684	0.38	0.26	0.36	黒褐色土	10YR3/2	○	小礫、炭微量		
SK224	土坑	1区	B2・B3	3.794	0.77	0.50	0.40	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP225	ピット	1区	B3	3.737	0.22	0.19	0.31	暗褐色土	10YR3/3	△	炭微量		
SP226	ピット	1区	B3	3.708	0.45	0.36	0.38	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SK227	土坑	1区	B2・B3	3.763	0.83	0.74	0.31	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫、炭微量	土師器、瓦質土器	
SP228	ピット	1区	B2	3.763	0.34	0.27	0.26	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SK229	土坑	1区	B2	3.749	1.08	0.79	0.25	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	須恵器、土師器、瓦質土器	
SK230	土坑	1区	B2	3.746	0.80	0.61	0.19	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫微量、炭微量	土師器	
SK231	土坑	1区	B2	3.751	0.80	0.62	0.07	黒褐色土	10YR2/3	△	炭微量	土師器	
SP232	ピット	1区	A2・B2	3.775	0.41	0.36	0.08	黒褐色土	10YR2/3	△	炭微量		
SP233	ピット	1区	B2	3.465	0.33	0.28	0.30	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭少量	土師器	
SP234	ピット	1区	B2	3.459	0.30	0.24	0.20	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP235	ピット	1区	B2	3.599	0.33	0.28	0.34	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SK236	土坑	1区	B3	3.676	1.50	(0.87)	0.65	個別図参照				陶器、土師器、瓦質土器	
SP237	ピット	1区	B3	3.643	0.39	0.36	0.16	暗褐色土	10YR3/3	△	砂混じり、小礫微量、炭微量	土師器	
SP238	ピット	1区	B3	3.675	0.32	0.27	0.25	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量	土師器	
SP239	ピット	1区	B3	3.721	0.44	0.37	0.21	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫微量、炭微量	土師器	
SP240	ピット	1区	B2	3.735	0.23	0.23	0.17	黒褐色土	10YR2/3	○	小礫ごくわずか、炭微量	土師器	
SP241	ピット	1区	B3	3.738	0.28	0.26	0.25	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫微量、炭微量	陶器、土師器、瓦質土器	
SP242	ピット	1区	B3	3.748	0.35	0.29	0.13	黒褐色土	10YR2/3	△	炭微量		
SK243	土坑	1区	B3	3.675	0.56	0.26	0.30	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量	土師器	

志手町遺跡遺構一覧表⑤

遺構番号	遺構種別	調査区域	グリッド	検出標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SP244	ピット	1区	B3	3.705	0.44	0.30	0.34	暗褐色土	10YR3/3		褐色土（10YR4/6）ブロック少量、小礫、炭微量	土師器	
SP245	ピット	1区	A2	3.711	0.19	0.18	0.24	暗褐色土	10YR3/3	△	炭微量		
SP246	ピット	1区	A2	3.748	0.38	0.32	0.45	暗褐色土	10YR3/3	△	炭微量		
SP247	ピット	1区	A3	3.727	0.34	0.26	0.16	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫少量、炭微量		
SK248	土坑	1区	A2・A3	3.809	0.67	0.56	0.55	個別図参照				土師器	
SP249	ピット	1区	A3	3.716	0.45	0.28	0.54					土師器	
SP250	ピット	1区	A4	3.534	0.30	0.24	0.23	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭微量	土師器	
SP251	ピット	1区	A4	3.515	0.51	0.31	0.28	暗褐色土	10YR3/3	△	小礫、炭微量	土師器	
SP252	ピット	1区	B3	3.763	0.47	0.30	0.29					土師器	
SP253	ピット	1区	B2	3.749	0.48	0.30	0.11	暗褐色土	10YR3/3	○	小礫少量、炭微量		
SK254	土坑	1区	B4	3.777	0.72	0.67	0.40					土師器	
SP255	ピット	1区	B5	3.506	0.34	0.31	0.18					土師器	

※粘性の記号は次のとおりとする（◎：強い、○：やや粘性あり、△：弱い）

遺　物　観　察　表

第1表　志手町遺跡出土土器・陶磁器観察表①

挿図番号		器種		出土地点		法量（cm）		器面調整		色調（外面／内面）	備考
						直径	器高	外面	内面		
第9図	1	青磁	鉢	1区	SB1（SP160）			施釉、鎬蓮弁文	施釉		龍泉窯
	2	土師器	坏	1区	SB1（SP159）		4.2	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ	橙褐色／橙褐色	
	3	土師器	小皿	1区	SB1（SP157）	□径（8.2）	1.6	磨滅、回転糸切り	磨滅	橙褐色／橙褐色	
	4	土師器	小皿	1区	SB1（SP159）	□径（9.0）	1.1	回転ナデ、回転糸切	磨滅	淡橙色／淡橙色	
	5	瓦器	椀	1区	SB1（SP157）		（1.8）	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色／灰褐色	和泉型瓦器椀
第11図	7	土師器	小皿	1区	SB2（SP205）	□径（7.9）	1.1	ヨコナデ、回転糸切	ヨコナデ	灰褐色／灰褐色	
	8	土師器	坏	1区	SB2（SP208）	□径（12.5）	4.9	ヨコナデ、回転糸切	ヨコナデ、ナデ	橙色／橙色	
第13図	9	青磁	碗	2区	SA1（SP077）		（3.5）	施釉、劃花文	施釉	黄褐色／黄褐色	
第15図	11	東播系須恵器	鉢	2区	SE010		（4.5）	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色・暗灰色／灰色・暗灰色	
	12	瓦質土器	鍋	2区	SE010		（2.5）	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色／にぶい橙色	
	13	瓦質土器	甕	2区	SE010		（4.2）	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色／灰色	
第22図	15	土師器	坏	1区	SK110	□径12.3	3.4	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ	明茶褐色・暗茶褐色／明茶褐色・暗茶褐色	
	16	土師器	坏	1区	SK110	□径12.9	3.5	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ	明茶褐色・暗茶褐色／明茶褐色・暗茶褐色	
	17	土師器	坏	1区	SK110	□径（12.4）	3.5	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ	明茶褐色／明茶褐色	
第24図	18	縄文土器	深鉢	1区	SK113		（3.5）	ヨコナデ	ナデ	暗茶褐色／茶褐色	上菅生B式
第26図	19	弥生土器	壺	1区	SK141		（4.7）	磨滅	磨滅	暗褐色／暗褐色	安国寺式
第28図	20	土師器	坏	1区	SK151	□径12.8	3.4	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ	橙褐色／橙褐色	
	21	土師器	坏	1区	SK151	底径（8.8）	（1.7）	磨滅、回転糸切	磨滅	橙褐色／橙褐色	
	22	土師器	耳皿	1区	SK151		1.7	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ	橙褐色／橙褐色	
第30図	23	備前焼	甕	1区	SK172・表土		（9.3）	ヨコナデ	ヨコナデ	灰赤色／灰赤色	
第32図	24	東播系須恵器	甕	1区	SK176		（7.7）	格子目タタキ	ナデ	白灰色／白灰色	
第35図	25	土師器	坏	1区	SK190		（1.4）	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ	茶褐色／茶褐色	
第37図	26	備前焼	甕	1区	SK191		（5.6）	ヨコナデ	ヨコナデ	灰赤色／灰赤色	
	27	土師器	小皿	1区	SK191	□径7.4	1.2	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ	にぶい橙褐色／にぶい橙褐色	
	28	瓦質土器	鍋	1区	SK191		（2.2）	ヨコナデ、指頭圧痕	ヨコナデ	淡褐色・黒褐色／淡褐色	
第43図	29	土師器	小皿	1区	SK214	□径（6.9）	2.1	回転ナデ、回転糸切	ヨコナデ	にぶい橙色／にぶい橙色	
第45図	30	東播系須恵器	鉢	1区	SK215		（3.5）	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色／灰白色	
第51図	31	土師器	坏	1区	SK248	□径（13.1）	4.3	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ	橙色／橙色	
第56図	32	白磁	碗	2区	SX093		（2.2）	施釉	施釉	灰白色／灰白色	玉縁碗
	33	施釉陶器	天目碗	2区	SX093		（2.5）	施釉	施釉	灰色・褐色／暗褐色	中国産天目
	34	施釉陶器	天目碗	2区	SX093	底径（3.4）	（2.4）	施釉	施釉	オリーブ黄色・淡橙色／オリーブ黄色	中国産天目か
	35	古瀬戸	梅瓶	2区	SX093		（2.6）	ヨコナデ、自然釉	ヨコナデ、指頭圧痕	灰白色／灰黄褐色	
	36	備前焼	擂鉢	2区	SX093	□径（30.8）	（6.5）	ヨコナデ	ヨコナデ、櫛目	黄灰色／黄灰色	
	37	瓦質土器	羽釜	2区	SX093		（3.9）	ヨコナデ、鍔	ヨコナデ	暗灰色／暗灰色	
	38	瓦質土器	鍋	2区	SX093		（5.2）	ヨコナデ、指頭圧痕	ヨコナデ	にぶい橙色／にぶい橙色	
	39	瓦質土器	甕	2区	SX093		（5.0）	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ目	黄灰色／黄灰色	
	40	瓦質土器	擂鉢	2区	SX093		（6.6）	器面剥落	ヨコナデ、櫛目	淡赤橙色／淡橙色	二次焼成
	41	瓦質土器	擂鉢	2区	SX093		（1.0）	器面剥落	ヨコナデ、櫛目	淡赤橙色／淡橙色	二次焼成、40と同一個体か

第１表　志手町遺跡出土土器・陶磁器観察表②

挿図番号		器種		出土地点		法量（cm）		器面調整			色調（外面／内面）	備考
						底径	器高	外面	内面			
第59図	42	土師器	坏	2区	SP003	底径(7.9)	(2.3)	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		にぶい橙色／にぶい橙色	立会調査時出土
第61図	43	焼締陶器	甕	2区	SP046		(7.3)	ヨコナデ	ヨコナデ		にぶい橙色／にぶい橙色	常滑か
第67図	46	土師器	坏	2区	SP062	口径(10.0)	3.5	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		にぶい橙色／にぶい橙色	
第69図	47	青磁	椀	2区	SP078		(3.2)	施釉、鎬蓮弁文	施釉		灰オリーブ色／灰オリーブ色	龍泉窯
第71図	48	青磁	椀	1区	SP105		(2.2)	施釉	施釉		緑灰色／緑灰色	
	49	土師器	坏	1区	SP105	口径(13.4)	4.2	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		明橙褐色／明橙褐色	
第73図	50	土師器	坏	1区	SP106	口径(12.5)	3.9	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		明橙褐色／明橙褐色	
第77図	52	土師器	小皿	1区	SP114	口径(7.5)	1.4	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ、ナデ		明茶褐色／明茶褐色	
第79図	53	土師器	小皿	1区	SP122	口径(9.8)	1.5	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		明橙褐色／明橙褐色	
第81図	54	弥生土器	甕	1区	SP130	底径(5.3)	(3.3)	ナデ、タテハケ、指頭圧痕	ナデ、指頭圧痕		明茶褐色／暗茶褐色	
第83図	55	土師器	小皿	1区	SP136	口径(7.5～7.9)	1.6	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ、ナデ		暗橙褐色／明橙褐色	
	56	土師器	坏	1区	SP136	底径(9.0)	(1.2)	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ		明茶褐色／明茶褐色	
第85図	57	土師器	坏	1区	SP137	底径(7.8)	(1.5)	磨滅	磨滅		橙褐色／橙褐色	
第87図	58	施釉陶器	椀	1区	SP150		(1.7)	施釉	施釉		白灰褐色／白灰褐色	中国産天目椀か
第89図	59	瓦質土器	鍋	1区	SP175		(3.2)	ヨコナデ	ヨコナデ		淡褐色／淡褐色	
第91図	60	土師器	小皿	1区	SP188	口径(7.2)	1.1	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ、ナデ		暗褐色／暗褐色	
第93図	61	土師器	鍋	1区	SP193		(2.2)	ヨコハケ	ヨコハケ		黒褐色／暗褐色	外面煤付着
第95図	62	土師器	小皿	1区	SP197	口径7.7	2.0	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ、ナデ		暗橙褐色／暗橙褐色	
	63	土師器	小皿	1区	SP197	口径7.8	2.1	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ、ナデ		暗橙褐色／暗橙褐色	
第97図	64	土師器	坏	1区	SP213	底径(7.6)	(2.5)	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		橙色／橙色	
第99図	65	土師器	坏	1区	SP220	口径12.7	3.0	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		橙色／橙色	土器祭祀、66と重ねて埋置
	66	土師器	坏	1区	SP220	口径(12.8)	3.1	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		橙色／橙色	土器祭祀、65の下に埋置
	67	土師器	坏	1区	SP220	口径(13.2)	3.3	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		にぶい橙色／にぶい橙色	
第101図	68	土師器	坏	1区	SP222	口径(13.6)	4.1	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ		橙色／橙色	
第103図	69	施釉陶器	椀	1区	SP241		(1.7)	施釉、露胎	施釉		にぶい橙色／にぶい橙色	二次焼成、中国産天目か
	70	瓦質土器	鉢	1区	SP241		(2.8)	ヨコナデ	ヨコナデ		にぶい黄橙色／にぶい黄橙色	
第106図	71	青磁	椀	1区	遺構検出時	口径(14.4)	(3.5)	施釉、鎬蓮弁文	施釉		オリーブ灰色／オリーブ灰色	
	72	青磁	椀	2区	遺構検出時		(2.5)	施釉	施釉			
	73	青磁	椀	2区	遺構検出時	底径(5.4)	(1.8)	施釉	施釉			
	74	備前焼	甕	2区	表土		(5.8)	ヨコナデ	ヨコナデ			
	75	土師器	坏	2区	遺構検出時	口径(13.2)	4.2	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		にぶい橙色／にぶい橙色	
	76	土師器	坏	1区	遺構検出時	口径(13.7)	4.2	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ		褐色／にぶい橙色	
	77	土師器	坏	1区	遺構検出時	底径(9.2)	(1.9)	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ		暗橙褐色／暗橙褐色	
	78	土師器	坏	1区	遺構検出時	底径(8.5)	(2.8)	回転ナデ、回転糸切	回転ナデ、ナデ		暗橙褐色／暗橙褐色	
	79	土師器	小皿	2区	遺構検出時	口径8.5	1.8	回転ナデ、回転糸切後板状圧痕	回転ナデ		橙色／褐灰色、にぶい橙色	
	80	瓦器	椀	1区	遺構検出時		(2.5)	ヨコナデ	ヨコナデ、暗文		灰色／灰色、灰白色	和泉型瓦器椀
	81	京都系土師器	皿	1区	遺構検出時	口径(10.0)	(1.8)	ヨコナデ、未調整	ヨコナデ		暗褐色／暗褐色	
	82	土師器	鍋	1区	表土		(5.2)	ハケ目、ナデ、指頭圧痕	ハケ目		にぶい黄橙色／にぶい黄橙色	
	83	土師器	鍋	1区	表土		(5.5)	ヨコナデ、指頭圧痕	ヨコナデ、ナデ		にぶい橙色／にぶい橙色	
	84	土師器	鍋		立会調査（第Ⅲ層）		(3.5)	ヨコナデ	ヨコナデ		浅黄橙色／浅黄橙色	

第１表　志手町遺跡出土土器・陶磁器観察表③

挿図番号		器種		出土地点		法量（cm）		器面調整		色調（外面／内面）	備考
						底径	器高	外面	内面		
	85	瓦質土器	鍋	1区	遺構検出時		(6.4)	ヨコナデ、タテハケ ヨコハケ	ヨコナデ、 ヨコハケ	浅黄橙色、褐灰色 ／灰黄褐色	
	86	瓦質土器	鍋	1区	遺構検出時		(4.6)	ヨコナデ、タテハケ （やや磨滅）	ヨコハケ	黒褐色 ／黒褐色	
	87	瓦質土器	鍋	1区	遺構検出時		(3.7)	ナデ、ハケ目、指頭 圧痕	ヨコハケ	灰褐色 ／灰褐色	
	88	瓦質土器	擂鉢	1区	遺構検出時		(5.5)	ナデ	ナデ、擂目	橙色 ／橙色	
	89	染付磁器	碗	2区	表土	底径4.0	(2.6)	施釉、染付	施釉	灰白色 ／灰白色	肥前系

第２表　志手町遺跡出土土製品観察表

挿図番号		器種	出土地点		法量（cm）			重量（g）	素材	備考
					長さ	幅	厚さ			
第9図	6	管状土錘	1区	SB1（SP154）	4.4	1.9		14.6	土	孔径0.7cm
第106図	90	鞴羽口	2区	遺構検出時	(4.0)	(3.2)	(2.2)		土	
	91	管状土錘	2区	表土	(4.1)	0.9		3.1	土	孔径0.3cm

第３表　志手町遺跡出土石製品観察表

挿図番号		器種	出土地点		法量（cm）			重量（g）	素材	備考
					長さ	幅	厚さ			
第16図	14	石臼（茶臼）	2区	SE010	15.7			3950	凝灰岩	擂目6分画
第63図	44	砥石	2区	SP054	(4.9)	3.9	3.8	89.6	砂岩	赤色顔料付着

第４表　志手町遺跡出土金属製品観察表

挿図番号		器種	出土地点		法量（cm）			重量（g）	素材	備考
					長さ	幅	厚さ			
第13図	10	鉄釘	2区	SA1（SP071）	8.5	4.9	2.5	107.3	鉄	
第65図	45	鉄釘	2区	SP058	4.4	1.5	1.2	7.5	鉄	
第75図	51	鉄釘	1区	SP109	4.3	0.4	0.1	17.7	鉄	
第106図	92	鉄釘	1区	遺構検出時	4.3			14.1	鉄	表面に石付着
	93	鉄釘	1区	遺構検出時	7.2	2.1	1.3	44.4	鉄	

写　真　図　版

志手町遺跡から東方　青江川河口を望む

志手町遺跡から西方を望む

図版２

志手町遺跡から南方　門前遺跡を望む

志手町遺跡　１区　空中写真

志手町遺跡　２区　空中写真

志手町遺跡　１区　完掘（東から）

図版４

志手町遺跡　２区　遺構検出状況（西から）

志手町遺跡　２区　完掘（西から）

調査前状況

遺構発掘作業

２区　土層断面

１区　土層断面

SB1

図版6

SB1検出状況

SB1（SP154）

SB1（SP154）骨出土状況

SB2（SP208）

SB2

ST116（西から）

ST116（南から）

腕骨除去状況

頭骨除去状況

完掘状況

図版8

SE010

SE010木製品検出

SE010完掘

SK110

SK110遺物出土状況

SK151

SK172

SK191

SK236

SD007

SX093

SX093遺物出土状況

SX093備前焼出土状況

図版10

SP002

SP002礎盤石

SP054

SP062

SP106

SP114

SP136

SP197

SP220（東から）

SP220（南から）

SP220　上部祭祀土器取上状況

SP024

SP139

図版12

第9図 1

第9図 5

第9図 2

第9図 3

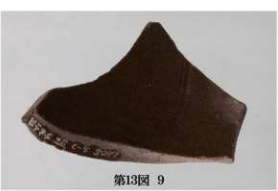
第9図 6

SB1出土遺物

第11図 8

第11図 7

SB2出土遺物


第13図 9

SA1出土遺物

第15図 11

SE10出土遺物

第15図 12

第15図 13

第16図 4

SE10出土遺物

第22図 16

第22図 15

SK110出土遺物

第24図 18

SK113出土遺物

第26図 19

SK141出土遺物

図版14

第28図 20

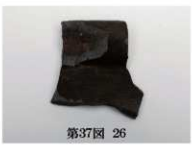
SK151出土遺物

第30図 23

SK172出土遺物

第32図 24

SK176出土遺物



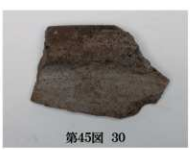
第37図 26

第37図 27

SK191出土遺物

第43図 29

SK214出土遺物



第45図 30

SK215出土遺物

第51図 31

SK248出土遺物

第56図 32

第56図 36

第56図 34

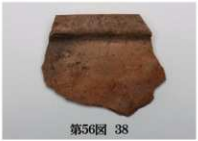
第56図 33

第56図 35

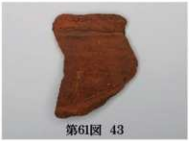
SX093出土遺物

第56図 37

第56図 39


第56図 38

SX093出土遺物


第61図 43

SP046出土遺物

第63図 44

SP054出土遺物

第67図 46

SP062出土遺物

第69図 47

SP078出土遺物

第71図 49

SP105出土遺物

第73図 50

SP106出土遺物

第77図 52

SP114出土遺物

第79図 53

SP122出土遺物

第83図 55

SP136出土遺物

第87図 58

SP150出土遺物

第89図 59

SP175出土遺物

第93図 61

SP190出土遺物

図版16

第95図 62

第95図 63

SP197出土遺物

第99図 65

第99図 66

SP220出土遺物

第121図 68

SP222出土遺物

第103図 69

第103図 70

SP241出土遺物

第106図 71

第106図 74

第106図 75

第106図 81

第106図 86

第106図 89

調査区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	してまちいせき
書名	志手町遺跡
副書名	国道217号（平岩松崎バイパス）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	横澤　慈
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152　大分市牧緑町１番61号　　TEL　097-552-0077
発行年月日	西暦　2020年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
してまちいせき 志手町遺跡	つくみし 津久見市 してまち 志手町	44207	207015	33° 4′ 46″	131° 50′ 50″	2018.4.16～ 2018.5.21	916㎡	国道217号（平岩松崎バイパス）道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
志手町遺跡	集落	中世	掘立柱建物、柵列、井戸、土坑墓、土坑、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、青磁、白磁、陶器、瓦器、瓦質土器、土錘、砥石、鉄釘	土坑墓ST116から横臥屈葬状態の埋葬人骨出土

要約	志手町遺跡の発掘調査は国道217号（平岩松崎バイパス）道路改良事業に伴い実施した。 確認された主たる遺構は掘立柱建物2棟（SB1、SB2）、柵列（SA1）、井戸（SE010）、土坑墓（ST116）、土坑、柱穴である。建物はいずれも総柱の掘立柱建物で、倉の可能性が高い。遺構の年代は14世紀を中心とし、一部15世紀前半に下がる可能性がある。遺物は在地の土師器が大多数を占め、少量ながら東播系須恵器や瓦質土器、備前焼、中国産の青磁や白磁、天目碗が出土している。かつ青江川の河口近くで旧河道に面するという立地や倉を中心とした遺構の構成、そして少量ではあるが輸入陶磁器等が出土することから、遺跡の性格としては物資集散地であった可能性が考えられる。

志　手　町　遺　跡

国道217号（平岩松崎バイパス）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書　第12集

令和 2 (2020) 年 3 月 31 日

編集・発行　大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152
大分市牧緑町 1－61
TEL　097-552-0077

印　　刷　元屋印刷株式会社
〒876-0811
大分県佐伯市鶴谷町 3 丁目 1 番 9 号
TEL　0972-24-0900